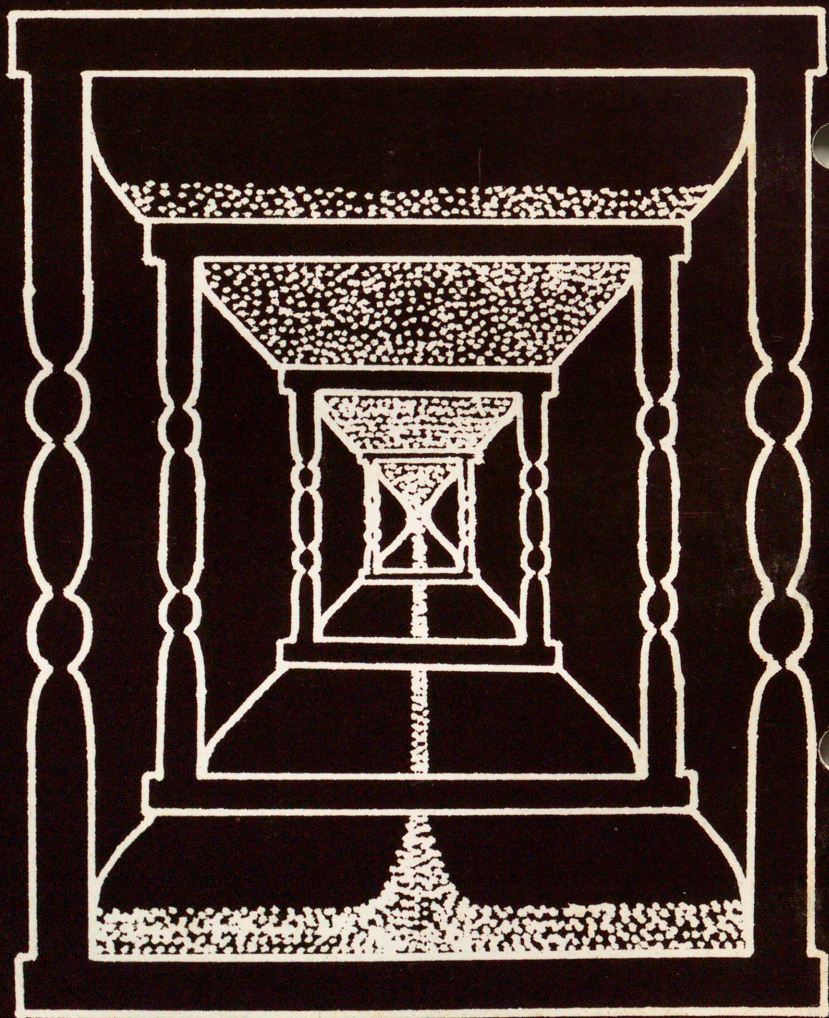


ふじみの



15

東京農大畜友会



第 8 3 回 体 育 祭

表紙の言葉

時は流れる。立ち止ったり振り返ってはくれない。
砂時計の砂のように。
時のすぎゆくままに人生をむだにはすごすのは
よそう。
だって若いときは2度とないのだから。

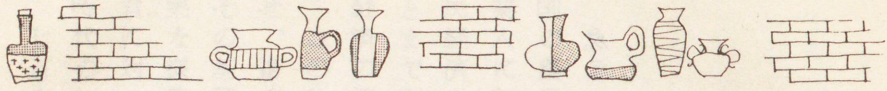
表紙デザイン 畜産2年 小林真美

巻 頭 言

畜友会委員長 野 中 勝

実に生意気なようだが、「責任」という言葉を近頃、考えるようになった。はなはだ抽象的でもどうにもとらえようがない。こいつには、随分悩まされた。畜友会委員長として存在したこの一年間、この言葉に苦しめられたのも確かだ。情けない話したが、生まれてからこのかた、「責任」なるものを実感として味わった覚えがとんとない。小さい頃は両親を、小学校、中学校では先生を、ただ無邪気に信じて生活し、高校では、ひたすら理屈をこねまわし、ここに至って、はじめて実感した訳だが、しかし、とにかくやかいな代物だ。どの程度までこいつの領分なのか皆目、見当がつかない。それでいて、正確な判断と行動を要求し、その上、生じた結果の後仕末。熱が出そうだ。けれども、随分とためになる。少しでも、実感として肌で受け取められてよかったと今思う。最後に、これを書いていてふっと思った。

「責任」。この言葉を本当にかみしめて、生きている人がどのくらいいるのかと。



ふじみの
目次
第15号

巻頭言	畜友会委員長	野中勝	1
畜友会の諸君に望む	畜産学科長	鈴木正三	5
タンバク質と畜産	教授	杉村敬一郎	7
スイス酪農紀行	教授	吉村喜彦	9
狸汁始末記	教授	伊藤澄麿	11
家畜繁殖に関する言い伝えの真偽	助教授	石島芳郎	15

山地酪農

放言放題	畜産一年	松山邦夫	17
------	------	------	----

詩

フォー・エバー	畜産四年	筒若古井戸	19
二日酔いのラメンテーション・微笑むこと	畜産一年	終日公房	19
最後の基本的な事柄	畜産四年	小栗実	20
愛、その幻惑の世界の中で	畜産一年	杉浦伸之	21
僕の好きな詩	畜産二年	奥田晃一郎	23

記行文

ヨーロッパ貧乏旅行	畜産二年	加藤是宏	25
-----------	------	------	----

日記より

根釧パイロットファーム『北の詩』より	畜産三年	木原幸男	31
恋の痛み	畜産四年	S U	32

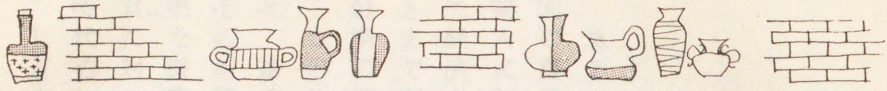
随想

発つ鳥あとを濁す	畜産四年	小栗実	34
動物の遊び行動	畜産二年	杉山康雄	36
牛はつらいよ 大分慕情	畜産三年	今村均	38
文明社会の中の家畜と人間	畜産四年	武田章	39

研究室だより

家畜育種学研究室	家畜経営学研究室	47
家畜繁殖学研究室	畜産物利用学(卵)研究室	48
家畜飼養学研究室	畜産物利用学(乳)研究室	48
家畜衛生学研究室		46

昭和五十年年度畜産学科卒業論文題目一覧表	50
昭和五十年年度畜友会行事報告	58
昭和五十年年度畜友会会計報告	59
編集後記	60



畜友会の諸君に望む

畜産学科長 鈴木正三

急テンポに偏したわが国の工業生産拡充はその経済の高度成長の直因となり、遂にはわが国の農業発展のバランスを崩すことになった。農業用地は工業用地に転移され、農業人は工業人に転職し、その農家戸数も五百万戸を割ったとか。戦後の日本の産業の復活、興隆、国民経済生活の向上安定には致し方ない方策であったかも知れない。わが畜産部門は生物工業とまで別称され、土地を離れ、農業から離脱した生産部門に推移しつつある。わが国の社会経済の濁流に翻弄されている畜産である。

この秋に当りわが国の畜産を農業の正常な生産部門に返り咲かせ本来の畜産の姿を復元させ、畜産物の増産確保を計り国民、社会の要請に応えなければならぬ。急速な伸長のためその基調の軟弱なわが国の経済界に打ちよせた不況の荒波をまともにかぶった畜産の不動堅実な状態に立ち戻らせねばならぬ畜産学徒の使命たるや洵に重且大である。畜友会の学生諸君に対する社会の期待は実に大きい。混迷を続けるわが国の畜産をリードし来るべき食糧難時代の打開策を講ずる重責は諸君の双肩にあると言ってもよい。

七百名を擁する大世帯の畜友会は委員長始め役員諸士の真摯な努力によって年間の行事も

無事終了に近づいた。もとより畜産学科と畜友会との関係は今更贅言を待たず不離一体にして、畜産学科の発展は畜友会の前進につながり、畜友会の幸福は畜産学科の幸運に結びつくものである。何時も述べるように畜産学科の学生相互間の知識の啓蒙と親睦を計る所謂親睦団体が畜友会であり、会員諸君の円満にして充実した学生生活を過すよう互に手を結び合つて前進するのがその性格である。畜産学科を経系とし、畜友会を緯系として織りなす親睦団体である。例年、畜産学科の各種行事の一端を扶けよくその目的遂行実践に精励して来た。春、新入生歓迎の催しに始り、講演会の開催、秋の収穫祭にからむ行事など、そしてこの機関誌の刊行と打続く多彩な行事の跡を顧みて重ねて役員各位の労を多とするものである。

この機において敢えて望みたいことは各自その学生生活を反省し前進への基礎固めにしてもらいたいことである。よく世に批判されることであるが現代の若者は体格は立派に伸長しているが中味は薄く、知識、常識は欠如しているとか。心身一体の発育を切に念願するものである。そしてこの転機に境遇する農業人、畜産指導者としての畜友会諸君の円満な成長こそ四六時中も忘れ得ぬ悲願である。これまた常に言う通り、畜友会の諸君は立派な人格の青年学徒であり紳士である。自信をもって行動し精進されるよう望みたい。諸君には誰にもない立派な個性と実力とが潜在していることを大いに自覚すべきである。立ち遅れた幼稚な言動は排除して一層人格の錬成と知識の陶冶に精励し農大畜産学徒としての襟度をもって堂々世に出てもらいたい。臆することなき諸君の確実な前進の執跡こそ社会への神聖な貢献となつて諸君のバラ色の人生への光輝ある道程とならう。

タンパク質と畜産

(昭和五十年十二月八日記)

教授 杉村 敬一郎

良質の飼料を与えれば、家畜が良く育つことは当然のことだけれど、昨今のように穀類生産が危なくなつて来ると、その価格も騰るし、また、経営経済的なことを度外視して、地球資源的に見ても、飼料に多量の穀類を用いて畜産物を得た場合の附加価値が疑問視されざるを得なくなる。畜産と云う行為の主な意義を、良質な動物タンパク質の生産にありと考えるならば、この状況は畜産の存在意義をゆさぶるような大問題である。

動物性タンパク質と植物性タンパク質の栄養上の相異は、一般的に見て、消化性と云う問題のほかに、前者には必須アミノ酸が、より多量に含まれていると云うことであつて、之が動物性タンパク質が高価値だと云われるゆえんである。農生産が低下したりして、「穀貴」の状況になると、飼料の消化吸収率の高低が前述の附加価値決定の鍵を握るであろう。さらに、栄養的には低価値と考へられているタンパク質から動物性タンパク質を如何

に効率良く生産するかが代謝上の課題となるであろう。

今では、飼料添加物として、例えばメチオニンやリジンなど、制限因子として働きやすいアミノ酸を用いている。之は、飼料タンパク質の欠点をさがし出して、それを補うための処置である。しかし乍ら、メチオニンを生産するため、或はリジンを生産するためにメチオニンやリジンをを用いることなら誰でも出来る。飼料タンパク質の欠点をさがし出して、その不足な分を補えば家畜が早く、良く育つなどと云う当然のことを、得々として研究成果などと云っていられる時代は既に過ぎた。

そもそも、良い栄養とは、その動物の種類と状況に最も合致した調和が、食餌組成の上に得られていることを云うのであつて、特定の物質が栄養的に良いとか悪いとか云う捉え方はすべきではない。量が適切でなければ大概の物質が成育阻害的、或は毒性的ですらあるものだ。緊急状況に対応するために薬物的な意味で用いる場合のほかに、食餌成分の最適バランスの追求が家畜栄養学の定常的課題であり、個々の成分の役割りの研究も、究極には此の課題のためのプロセスの一段階なのである。

一個の営農を向上させるための技術開発や工夫は勿論大切である。しかし、常に世界的食資源の合理的な利用の方途を想うべきであつて、一企業の向上も此の大課題

の推進の一環として、はじめて有価値となるだろう。卒業後は大学卒業者として社会生活をすることになるけれど、現実には身を置く場所は自らの営農向上や一企業の発展のために働く毎日となるだろう。それはそれで結構だと私は思う。けれども、例えば上述のような大きな課題を胸の裡にたたんでおいて、折りあるごとに此の視座から物を考え、可能な限りの行動をすることが、大学卒業者の社会的使命と云うべきであるから、学生と云う、とらわれの少い身分のうちに、大いに問題意識をもち、具体的な課題をふまえて受講したり、卒論研究に取り組んでほしいと思う。一つ一つの私たちの講義は、狭い局面での話が多いだろう。卒論研究の課題も、大ぶろしきをひろげれば、かえって何も出来ないだろう。従って、卒論テーマは、ほんの小さな一つのことの解決や発見で結構だ。心広く全人類的課題を持っている卒業生たちの今後の実践によって、小さなことが大課題の解決に結びついて行くことを忘れてはならない。大学とはそのためだけに存在するのではないだろうか。

(家畜飼養学研究室主任)

スイス酪農紀行

助教授 吉村喜彦

今夏、ヨーロッパ畜産事情視察団の一行に加わり、帰途単身、スイスのチューリッヒに滞在し、一カ月間自炊生活を経験した。ことに、一カ月間日本語が使えず専らドイツ語で過したのには、貴重な体験といえよう。

毎日、スーパーやパートの食品部へショッピングし、物価の高いといわれているスイスと日本とを比較して次のことがわかった。

日本より高い食品は、砂糖、植物油、卵

日本より安い食品は、野菜等は、乳・牛製品、ビール、ワイン、その他酒類。野菜中、ジャガイモは（スイスでは10%自給）日本の半値ぐらい。日本とほぼ同じ値段であったのは、プロイラーであった。果物は、サクランボ、アンズ、スモモ、モモ、メロン、ブドウ、リンゴ等は、日本より安く、美味であり、農家にいわせると、化学肥料を使わず堆肥のみを昔から使っていると。パートの商品の種類は、日本よりずっと少ないが、買物客の買い方も日本よりずっと少ない。安い安いの叩き売りもなく、

至って静かである。しかし、ビールはよく飲む。お昼の二時間、レストラン以外の商店や銀行・役所の電灯が消える。そして、サラリーマンも主婦も老人達もお昼を楽しむ。レストランの戸外のテーブルにはビールを飲む人、コーヒを飲む人（ネスカフイ）で溢れる。私もよく飲んだが、中ジョッキイが日本円で一七〇円、小ジョッキイが一〇円ぐらいで、毎日飲んでも知れている。チューリッヒのバーンホッフ（中央駅）の構内を通るたびに、いつでも見かける頭の禿げたおじさんがビールを飲んでいた光景を想い出す。ともかく、スイスは、ヨーロッパで一番インフレが小さく、安定した食生活ができる。スイスは、国土が美しく観光資源に恵まれた国というだけでなく、何故このよう安定した食物の供給がなされているのであろうか。

この間に答えてくれた人は、スイス国民経済省農務局ギゼイ氏であった。スイスは、中立国であるが、第二次大戦中、食糧の輸入がストップし、国民は非常な苦勞をした。そこで戦後二度とこの苦勞をしてはならないというので、食糧自給体制の確立を国民の総意によって決定した。スイス人は一人として農業に理解のない人間はいないのであって、国が農業に財政投資をすることは、国民の意志であると。たとえば、酪農保護政策の一つと

して、高原地帯、中間地帯、山岳地帯(第Iゾーン・第IIゾーン・第IIIゾーン)は、降雪期間が各々異なり、第IIIゾーンなどは一年の半分が雪に閉ざされている。冬季間の飼料は、乾草・サイレーシ等では不足なので日本と同様に購入飼料に依存する。つほりスイス観光のコースにあるアルプス・ユンクフラウ・モンブラン・マッタホーン等の中復でみられる牛の放牧地帯が第IIIゾーンに属する。この期間中の補助金は、乳牛一頭当たり第Iゾーン一五〇フラン(一万七千円)・第IIゾーン一七〇フラン(三万円)・第IIIゾーン一四五〇フラン(五万円)である。但し最高限度一五頭までと。

第Iゾーンというのは、ジャガイモの栽培地帯で多くの農家が堆肥供給のため2〜3頭の牛を飼っている。ヨーロッパでは、イギリスのブリテイッシュフリージャン以外は、乳肉兼用種で、スイスでは、兼用種のシンメンタール・ブラウンスイス(ブラウンフイ)が主体であり、ホルスタインより体型が小さく、飼育しやすいのか、ずいぶん飼養規模の小さい農家が多い。ベルンの東方一〇〇kmほど離れエンタル地方の標高五〇〇mの酪農家を訪ねた時を話してみよう。

搾乳牛20頭・育成牛30頭の放牧経営であり、スイスでは規模の大きい方である。育成牛は、少しぐらいの雪の

中でも戸外で生活する。双眼鏡でさがさないと牛がどこ

にいるか見付けられないような飼い方でのんびりした感じである。しかし、夏場は本当によく働らく。休暇中の男の子は中学生以上だったら皆働く。(日本も以前はそうだった)労働時間は冬は働らけないから、夏は12時間労働で、乾草づくり、薪割りが仕事である。燃料はどこも農村は、薪である。村の小学校・役場・教会皆百年以上経た建物で、五〇才の牧場主は、村は子供の頃と全然変っていないといっていた。出された自家製のリンゴジュース・ブドージュースのすばらしい味覚であったことよ。主人は云う。「どうやら息子も牧場をやる気らしい。都会生活の話なんて話題になつたことがない。しかし、息子は自由なんだ。」と。

私は遠く故国を離れて思った。日本に残っている田園を守らねばならない。もう田園にこれ以上ブルトナーを入れてはならないと。

狸汁始末記

助教 伊藤 澄 磨

むかし、むかし、筆者が紅顔の美青年、いや光源氏の様な香しい頃のおはなしです。

枯草が未だ眠りから醒めず日の光の中に冬の終りのにほいのある朝の事でした。鈴の音とも思われる美声と、深々とうやうやしく一礼して飼養研のとびらを開いた藤たけた文字通りの貴婦人の訪問から始まります。

「先生は動物の区別がお分りでせうか？」

「???? 区別つたって、牛と馬ぐらいは分りますが。」

「先生、貉を御存知？」

「知りません。日本に於てはイマジナル・アニマルでせうね。カッパ、海ボーズの類と同様でありませんか」

「それでは狸を御存知？」

「知っています。」(小小白け気味です)

「それでは狸と狸との区別がお解りですか？」

「それは、それはえーと狸は犬の仲間だし狸は鼬の親類だから、顔が違うでせうし足の底も違うでせう。所でこは、畜産学科ですから、タヌキ、ムジナ、アナグマ、

コザルはあまり

関係がありません

んから動物学の方

か動物園にでも

問い合わされ

たらいかですか？」

「いやそれも大変ですから一度見て狸か

狸か判定していただきたいのです」

といふ強い要望により狸にくわしい二名、狸に強いと云ふ一名、計三名の学生を動員して出かけたのでした。

大手商社の部長級と一見出来る主人が現れて謂う事は、

「伊豆山中の岩ダナの下から拾った珍獣が年を経て怪獣になった、即ち月夜の晩には大騒ぎ、小々嗅気があり近所の愛犬、愛猫、を半殺しにし、二三日前には近くの人足の咬傷を負わせたのでベットとして飼育不能となつた。したがって貴研究室にさし上げる。しかし近い将来か遠い未来に毛皮として返還して欲しい」

との事、話が大変に変わって来ました。

「それではその動物を見せて下さい。」

と裏庭に行きました。「昼間はここに居ます。」とぬれ縁の奥を指示されましたが暗くて何も見えなのです。と



思った瞬間、ガラガラ（鎖の音）ガチガチ、ガチガチ（歯切しりの音）ガードン（鎖が延び切って着地）これらの音と共に巨大なタワシの様な生物が突ききして来たのです。鎖がもう十センチ長かったら筆者の股間動脈は切断されていた事でせう。そのタワシのお化けは私を狙って二度三度の跳躍をくり返すのです。その中の真赤に輝く怒りに満ちた二つの大目玉は野獣のものでありませんでした。しかしその真赤なタドンが貴婦人をとらえた瞬間、炎は消え、逆毛はフサフサとした豪華なファーに変り、甘ったれ狸がチンチンして居たのです。

「狸だ／ 狸だ／ 狸に間違いない。」

と衆議一決した結果我々のベットとなった訳です。当家に礼を述べ三人引きで再びタワシになった珍獣をつれて北門に帰った時は二時間の時が経ちました。たけり狂う猛狸は一瞬の目も離せず、とてもベットとして不適當と判定したのです。早速動研の湯浅先生にその旨伝えたる

「俺にまかせろ」

とのお話、さすが湯浅先生、初対面の猛狸をヒヨイとワシ



握みにして腕の中。可愛いイタスキは目を細めてごきげんでした。そして彼の室でトンビや小猿やスッポンやハヤの仲間入りをしたのです。

翌朝湯浅先生より「狸は引取って欲しい大至急！」と連絡を受けたのです。一般教養の木造の古い古い建物は未だ眠て居りました。一步入るなり返還理由が判明しました。鼻粘膜を突き通す野獣嗅が一面にただよっているのです。「尻が来た。」に違いないのです。又又飼養研の猛者連は猛狸を連れて半日学内を放浪したのです。行く先々で嗅い嗅いとものしられ、みじめな半日であった事でせう。一回だけ実験室の隅に繋いだ時、約一〇〇程のオモラシをしたのです。これが全畜産学科の研究室と廊下に狸嗅を充満させたのです、から。

何が「少々嗅気があるが」と旧主人の仲人口をうらんだとて後のまつり、今後如何にすべきかとの相談会が自然にもち上ったのです。

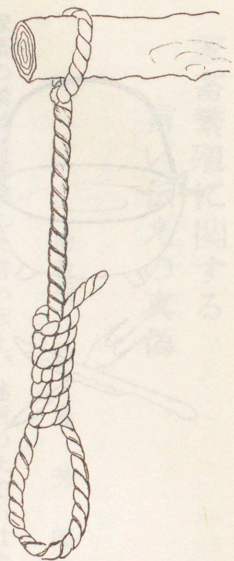
「動物園か動物商に引き取ってもらおう。」

「どこも狸はごめんだそりです。」

「厚木の山え放そり。」

「小田急から尻が来ると大変だ。」

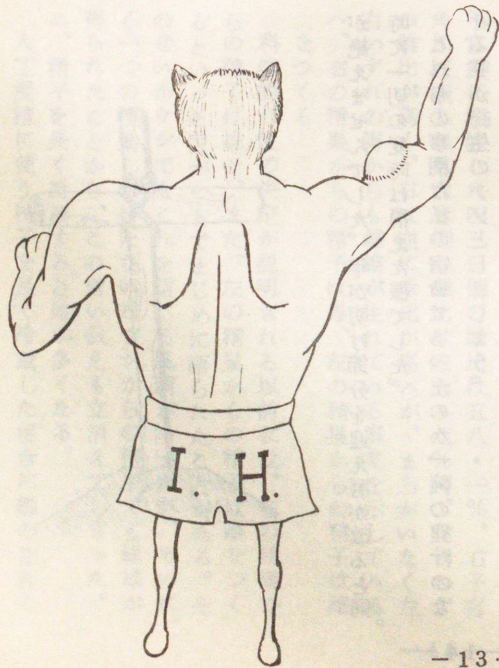
と思案中にたしか、〇君と記憶する。台湾の新高山探検隊員として帰国して未だ燃えていました。（現在国際馬



喰として益々燃えている人です）

「皆、この狸をベットとして愛した。であるからこの愛を永遠のものとし我々の命あるかぎり我々の肉体の中に宿そう」と、と生蕃（台湾の原住民）的ロジックで一席ぶった為全員カチカチ山の故事にならう事になりました。ハンギングの儀はS君が取り行い愛狸は赤い水となつてファーと枝肉に変わったのです。（現、S君現豚輸入の総本締め）

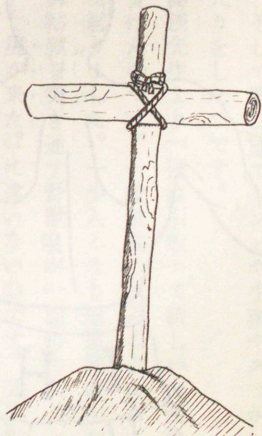
牛は牛なり豚は豚なり。枝肉の型は各動物に依り異なります。初めて見る狸の枝肉にしばし見とれたのでした。真白い脂肪に包まれた、柔かそやな筋肉があります。しかしプロポーションが異様なのです。立派な肩甲骨と発達し過ぎた前軀は牝牛の奇型の様でもあり兎の後軀に脛椎と頭骨をつないだ様な不可思議ものです。上半身正に筋骨隆々のプロレスラーとでも申しますか？ そり栄養



科の長谷川先生の様を御立派な体格なのです。穴居動物のバタインなのでせうか？ 解体後百℃の熱湯の中でアク抜きを行いました。辞書によれば、狸汁、(一)狸の肉が入ったミン汁、(二)ゴボー、大根、赤アズキ、トーフ、の入ったミン汁とあります。当然(一)としたのです。所が一ロガブリとしたとたん、全員「ウー」とうなったのです。とても狸汁なるしろものはノドを通す事は不可能なのです。しかし〇君の生蕃的愛情論に依って酔わされた猛者諸君、指で鼻をつまみ、ノドで呼吸を続け各々の肉

体の一部に化したのです。ファーは塩づけとして極く近い将来の約束履行となったのです。又行きがかり上一般教育の先生方も半丸の消化に手をかしてくだされニンニク、生ガ、トウガラシ、醬油の焼肉会は落涙にむせびながら無事終了した様であります。真実の愛を貫く事の偉大さを身をもって味わった事でありましょう。

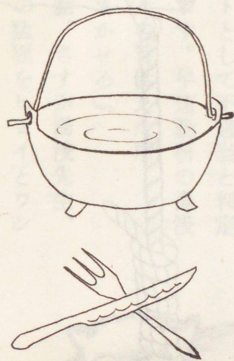
やがて葉桜の美しくなつた頃でした。突然に、全く突然に当研究室の教授が他界されました。夏過ぎて何人かの若い人達と別世界に住む事ともなりました。S君は南アルプス「雲の平」で飢死寸前となりO君と一緒に救出は成功しましたがO君は鎗ヶ岳のワキで台湾伝来の悪性伝染疾患の為飢死寸前者以上に死ぬ目に逢い、義父の死亡寸前の事故、自動車の盗難等々毎月毎月、明けても暮れても私の身のまわりから「生きた。死んだ。」の、事



が絶えませんでした。年が明け節分を迎え暦が改ると同時に一切の変時は消えた様でした。

これらの事柄は私の宿命であったのか一碗の狸汁のなせる業か終生のナゾとしましょう。

それ以来、貴婦人、特にファーに包まれた人は恐ろしいのです。身の毛がよだつ様に恐ろしい事はたしかです。



家畜繁殖に関する 言い伝えの真偽

助教授 石 島 芳 郎

家畜の繁殖に関連した言い伝え、迷信のたぐいは抜外多く、今もって信奉者も少なくない。ここにそのいくつかを紹介して、真偽のほどをさぐってみよう。
イ、満月に受胎したものは雌、新月に受胎したものは雄を生む。

ウシを飼う農家に信じられている迷信に、満月に受胎したものは雌、新月に受胎したものは雄を生むというものがある。この言い伝えは根拠のあるものだろうか。

この点について、埼玉県農業共済連合会妻沼家畜診療所の関根氏(一九五八)が興味深い結果を得ている。氏が五カ年にわたって調査した乳牛の満月受胎四〇三例および新月受胎五五六例の産子の雌比は、それぞれ、五三・一%および五二・二%で、いずれのとき受胎したのももいくぶん雌が多くなっていたという。この雌への偏りは別の問題として、満月に受胎しようが、新月に受胎しようが、どちらも雌雄が生れていることから、この言い伝えは科学的根拠がないといえる。
ロ、左卵巢からの卵子は雌、右卵巢からの卵子は雄になる。

古代ギリシャ時代に、左卵巢からは女の子が、右卵巢からは男の子が生れるという言い伝えがあり、かつてウシでまじめにこれが信じられた時代があった。これは、ウシの二つの卵巢が交互に排卵するということを結びつけて信憑性のあるものとして伝えられた。

この説は、卵巢を片方取ってしまったウシからでも雌雄が生まれること、さらに左右卵巢は必ず交互に排卵するとはかぎらないことがわかって、現在、信じる者もなくなったが、前述の関根氏がこれの真偽のほどを調査している。氏は、妊娠子宮角の左右がはっきりしているものから生れた一、〇〇〇例の子ウシの性をしらべ、左子宮角に妊娠した四三三例の雌比は五八・一%、右子宮角に妊娠した五六七例の雌比は四七・八%で、左がわずかに雌比が高く、右は逆に雌比が高いが、まちがいはなく左右いずれの側からも雌雄が生れている事実を示している。ハ、右の精巣からの精子は雄、左の精巣からの精子は雌をつくる

科学的に性の決定が説明される以前には、右の精巣からの精子は雄を、また、左の精巣からの精子は雌をつくるといった説がヒトでまじめに語られたことがある。そのせいかウシでもこれ信じる風潮があったが、あいに一つ一つの精巣しか持たない雄ウシからの精子でも雌雄が得られたことから、この言い伝えも立消えてしまった。

ニ、精子を長く冷蔵すると雌が多くなる。
人工授精に使う精子を長く冷蔵した場合に雌の生れる

確立が高くなるという説が、まだ凍結精液が普及していない時代にあった。それは、精液の冷蔵時間が一、二日の場合は性比が一〇・一であるが冷蔵が三日になると雌が多くになるといったもので、ヒツジャウシで実際にそういう傾向をみたという報告もあるが、冷蔵三日になると受胎率が低くなって実用性に乏しいといわれた。かりに冷蔵が長くなれば雌ということであれば、現在の人工授精では雌が氾濫してしまふことになる。今日、人工授精では逆に雄が多く生れるという噂もある。

ホ、出産は満潮のとき起る

昔から赤ん坊は満潮のときに生れるといった言い伝えがあり、家畜の場合にもこのことを信じている人が少なくない。この点については、家畜でははっきりした資料はないが、ヒトでは否定されている。

清水氏は浜松市の出産についてしらべ、一日の総出産に対する満潮時前後三〇分間に出生する赤ちゃんの割合は一〇・四であるのに対し、干潮時前後三〇分間に出生するのは一二・一%、あとはそれ以外に出生するといっており、満潮出産説を否定している。

家畜については、こうした調査はやられていないが、ブタでもヤギでも分娩開始時刻は一日中まんべんなく分布していることが知られているので、満潮と出産の関係は成り立たないようである。

ブタの種付時刻と分娩時刻に関連があって、朝種付す

れば分娩も朝に起り、夕方種付すれば分娩も夕方になるといった言い伝えが、養豚家のなかに残っている。

かつて筆者は、この真偽のほどをたしかめるために埼玉県下で調査したことがある。埼玉県飯能市で二五〇頭の雌ブタを対象に、おおよっぱに、種付時刻を午前と午後に分け、それぞれの時刻に種付したものの分娩開始時刻が、午前と午後によつて分配されるかをみたところ、午前の種付で分娩が午前に一致するもの三七%、午後の種付で午後に一致するもの五八%で、わずかながら午後種付の場合が一致するものが多い傾向を示したが、全体的に種付時刻と分娩時刻が一致する例とそうでない例はほぼ半々で、まず関連性は否定される成績であった。その後、種付時刻と分娩時刻の関係を一時間単位にきぎって再調査したところ、一致しない例が七二%と圧倒的に多い成績であった。このように、この言い伝えはあまり意味がないことが判明した。

おそらく、今のようになんか無看護分娩が普及されていなかったころ、分娩といえれば助産がつきもののため、分娩開始が夜中にならないよう願う気持から、偶然の経験談が伝わり伝わって、こうした言い伝えが生れたのであろう。

(この稿はT E L L U S 73年二月号、家畜夜話その十四に補足したものである)

山地酪農

放言放題

畜産一年 松山邦夫

まえがき

最近、食料危機という言葉がマスコミの間でもはやされ、騒がれている状態である。これは全世界的な問題になっているのであるが、特に日本では国土が狭い上に人口が増しにふえ、さらに、高度成長経済の名の下に工業重視・農業軽視の方向で政策がなされてきたために当然といえる現象であるとも言えるだろう。そんな中で民族の源泉に培うものとして低位生産のまま放置されている日本の山地を高度の生産地にする山地酪農を実習体験をいかして述べてみようと思います。

本論

山地酪農とは、第一に、舎飼いの酪農家にみられるような糞尿の処理に多大なる労力を必要とするものもなく、牛の健康を害するような牛舎内飼育でもなく、また諸設備に多額の費用をかけるものもない、山地周年昼夜放牧形式をとり、第二に、天然自然のエネルギーを十二分に

活用した、シバ及び優良牧草(放牧形式でとる草であり、あえて雑草を牧草と呼ぶ。私は牧草の概念を知りません)を主体草とし購入飼料代に悩まされることもなく、放牧により牛は従順になり、最も自然現象をそのまま受け入れた酪農である。第三に、無駄金をかけない経営をすることであり、第四に、配偶者同士の相互理解、しいては、子供達といつも微笑を忘れない家族形態をつくることである、また、牛を遊びの友とし、牛を大切にすることをあつちにする酪農であると思ふのです。

あとがき

多くの青年を御指導されている猶原恭彌博士の著書『日本の山地酪農』によれば、山地酪農の使命は、低位生産性のまま放置されている山地を高度の生産地にすることである。そして牛を良くするのもなく、また草地社会を良くするのもなく、創造的生産によって日本の人間社会を良くするのが使命である。と書いてある。そして山地酪農を説明する『三章』が掲げられている。それは、一、牧山で草を創造し、二、草を乳牛に処理させ、三、人は調整して牛乳、牛体を生産する。この『三章』をじっくりお考えください。

日本全山地が草地化されたら困るのでは、という愚考はされたいと思ひますが、とても考慮にいれる問題ではないと思ふ。

私たちは、いかに人間社会あるいは、日常生活を良くするかを考えたとき、ひとつの方法論として山地酪農に

とりかかるもよし、自然にそくした農業を何かするもよし、その他何か目標となる理想をかかげ、それを実践するよう試行錯誤の反復を繰り返しかえしこれからの生活、大学生を送ってはどうか。

次に、畜産実習について駄弁家の私が少し意見を出します。私が属する農大山地酪農研究会での話を基にして、書記をやっている関係上、投稿の任につきまます。まあ、ひとつの意見として気楽に聞いてください。

私共は毎休暇を利用して、というか、毎休暇は大抵実習をします。各地に点在する山地酪農家で一ヶ月前後の短期実習をさせていただいています。酪農実習の目的といったら大袈裟になりますが、それに近いものとしてふたつあげてみます。各人各様の目的を秘めています。ほぼ一致をみるものとして、不書の経文として実習をすること。つまり、頭でっかちの勉学をするだけにとまらず、生活を通じての生の勉学を重視し、身体を動かすことを第一歩としている事です。そして、ふたつめですが、初志をいかに貫徹するか。実地実行の場へと自らを向けるかを見出すことです。

皆さんの中には主に夏季休業中、実習をされた方が沢山いらっしゃると思います。私はここにひとつ提言したいことがあります。実習先紹介網を作成しませんかという事です。映えある畜産人を目指し畜産学科へ入学して大学の講義・実習により培われ、畜産学科生として目覚め、実際経営農家で実習して自己形成にあたりたい

と思われたであろう先輩諸氏がどの様なルートで農家にお世話になられたかをお聞きしたいとも思います。実習がしたくとも当てがない、行けても公共機関的な経営であったり、希望する場所には紹介してもらえない、個人経営でない、自分の考える経営にそった所がない。etc なかなか実習先も決定しがたい学生が多いのではないかと思います。個人経営の実農家へ実習された方々が寄り合って紹介網をつくる。後人に世話をしやる。体験談を発表する。相互学生間及び農家との広汎な和が生ずる。しいては畜産振興につながる。世は泰平。

実農家実習先案内の紹介網をつくりましょう。これは畜友会を中心に畜産学科生の協力の下に実現することです。又は、私達、先に実習した者が発起人となっても良いでしょう。私達、山地酪農研究会へ声をかけられても、また、会員各員に声をかけられても結構です。

将来、就職される方こそ、実習を必修かと思えます。それと、私が一年である故にかかわらず、特に畜産学科一年生の奮起を大いに期待いたします。以上、ロマンを求める男が書きました。



終 日 公 房



フォー・エパー

畜産四年 筒 苦 古井戸

他人の目を気にするほどに
自分を知ってはいないくせに

他人を責めるほどに

自分はなにも知らないくせに

他人をあわれむほどに

自分に思いやりがあるわけでもなく

毎日が 多く人形 のように

そして明日が来なければ

このままずっとねむりつづけて
明日が 来ないように

二日酔いの

ラメンテーション

つれづれなるままに

今、僕は待っている

線路に耳を付けて

田舎の線路には

たまにしか汽車は通らない

たまにしか……

風に戯れる落葉の音も

別の世界に……

今は何も聞こえない

僕の目には、たまにしか来ない汽車が映っている
でも、それは僕の求めている汽車じゃないんだ

信じ続けた
耳に伝わる汽車がきくと来ると

グシャ

こんなものだったのだろうか
僕が待ち続けたものは

脳むのは もうよそう
僕は羽を得たんだから
だだの猿猿だというのに
でも……

晩秋の夕暮れ
じょうびただけが僕の心を詞っている

何故か 淋しい二日酔い

微笑むことのできない君へ

君を包む その堅い殻をお脱ぎ

そのままでも 君は美しいさ
でも、君は

真赤なりんごを丸ごとかじれっこないさ
小枝に引っ掛かったお気に入りの紙風船だって

涙を浮かべて見上げるだけさ

もちろん 勇気はいるさ
君は シャボン玉なんだもの

勇気をお出し
冷たい風なんか さえぎってやるよ

そして 快い風が吹いたら
青い空に舞い上がれ

そしたら、君は
まばゆい光を浴びて 小鳥におなり

最後の基本的な事柄

畜産四年 小栗 実

『ええ』、わたくし、三月で終りでございます。
そりゃあ、悲しゅうございますとも。
でも、これからの希望の一かけらも、
ないわけじゃございませんから。

わたくしがふるえているようにございます。
けれど、
三月になれば終りになるのでございますから
そうしたら
きつとやさしい春が来ると思っている……

愛、その幻惑の世界の中で

畜産一年 杉 浦 伸 之

。妖精

妖精の羽ぶとんが風に静かに翻り
目を射る様な陽ざしはもうそこにはない
時は目覚め、黄金の大地は生命の息吹を――
しかしその地中深く
夜明けの響きのはるか及ばぬ所
予言者の涙の池に妖精は眠る
かたわらのあほう鳥の釈骸は白鳥を眠らせ
逆巻く時の木霊が妖精を甘い微睡にひき戻さんとす
る
今にも微笑がこぼれ落ちそうな表情――しかし真実

わたくしの成績でございますか
まあ、取りたてて良いというわけじゃございませんが、
人様に見せられない、
というほどでもございません。
今までの生活、おしなべてそうでしたが、
話題にのぼるといふような事もございましたし、
愛しく思う人とも、
浮いた話一つ、もち上ることはございませんでした。
『いえいえ』、さびしくなんかございません。
わたくしどもは、
夏の楽しさや冬のきびしさ、
春のやさしさや秋のさびしささえ感じられればもう十分
でございます。
実際、四年間などという時間、
今ではほんとうにあったのかどうかさえわからない状態
でございます。
先日などは『ふと』、
自分が農大生であることが、
まったく信じられなくなったりいたしまして、そりゃも
うひどくおどろかされてしまいました。
そんなわけで、
もう今では自分の存在さえ、
うたがわしいようないでございませう。
まるで今の寒さの中に自分がとけ込んで、
わたくし自身の寒さに、

の愛は知らない
虚構が心に忍びこみ偽りの花の種子をうけつけてしまつたのだ
いかに風が吹き荒び
いかに季節がめぐり行こうとも
妖精の瞳は霜にかたく閉ざされたまま――
妖精よ、いつになつたら目を覚すのか
緑なす野原でおまえを待ちうけている
純潔なる真実の愛があるというのに。

。神の愛、至上の愛

君の瞳の奥深く
神に捧げる愛が満ち溢れる
もう悲しみの涙は流れたりせず
時の厳かな歩みの中で
君の努力は虚しくない
神への愛が君の心の中
しだいにふくらんでいったのはいつからか……そう
数多くの生命の息衝をたたえた春
はなやかな純色に飾られた夏
落葉の音色もいたいたしげな秋
そして
緊張した淡彩画の様な冬
それらが僕に愛というものを悟らせてくれる前のこ

君のさしのべる手は
*
いつたい誰に向かつて呼びかけているのか
どうか僕の目を見つめてほしい
そして僕の瞳の輝きの中に
君に負けんばかりの愛を見いだせたなら
その時こそ僕は
いかなる時空も越えて
君に至上の愛を捧げるとしよう

。幻の映像

月のペールの下
白い霞の中に君の姿を……
この努力は虚しすぎるのか
君の瞳の輝きに目をすぼめ
咳き声には耳をおおってしまふ
微かばかりの勇氣も狂気に陥り
微笑の前には赤子同然
心の中の永久不滅の太陽よ
十年、千年、十を百万倍した年月……
いつになつたら消えてくれるのか！
微かな救いはときおりの部分日食のみ

僕の好きな詩^{うた}

畜産二年 奥田 晃一郎

時の微睡は存在しえず
あるのは恐しい現実
不協和音を導きあう人々
そして、偽りの泉の水をわかちあう人々……
彼等が誰であるにせよ
僕にとっては必要のない人達……

ひなげしと占星術
君と僕との間には気まぐれな人喰浜辺
優しい指先で僕の目を閉ざしてほしい
行くべき地はありはしないのだから

白い霞はますます濃く
君の幻はしだいに実体と化す
――ああ――
お願いだから微みかけないでくれ!!
僕には無理なんだ!!
――微笑を見せないでくれ――

……もう他人を愛せそうにない

青春とは 苦悩の連続でいいと思ふ
そこにのみ
人間革命の絶対的要件があるからだ

私は漫然たる一日をおくりたくない
堪え難き挑戦の中のみ
人間の価値の尊さがあることを知っているからだ。
青春とは 動揺と打撃の
異名かもしれない
しかし総てが自身の財宝^{たから}に
変わることを忘れまい

僕は君にいいたい
君は「逃げる」といわれても
絶対に「いやだ」といいられる
青年らしい潔癖さで
生きぬくのだ
苦しい思いがあっても
涙を流しながら
僕は 必ず人間勝利の詩を

歌ってみせるから
親友よ！君も自分の悲しみに負けず
君の生活の課題を
立派に乗り越えてくれ給え

人間の心中の苦しみとは
一つ一つの川を 毎日とびこえて
いくようなものかも知れない
そのために体力も必要とし
跳躍のための
あらゆる訓練が必要なのであろう

あくまで君は 君らしく
僕は 僕らしくという
徹底した人格を持ちながら
強い連帯の人間共和という
未聞にして至難の構築に
生涯をおくろうではないか

「若き友へ贈る」より

面白き
こともなき世を
おもしろく

高杉普作

彼らは 時代に酔っている
その後は 必ず悔いが残るであろう――
僕は 実生活に意義をもち
今日も 小さくして
栄光の歴史を

開きゆくのだ、
僕は 僕の道を 堂々と
真剣に 怠情に溺れず
高山に登るが如く今日も進む

「若き友へ贈る」より



記行文

ヨーロッパ貧乏旅行

畜産二年 加藤 是宏

昭和五十年の夏、その日は朝から雨であった。まるで私が日本から離れるのを淋しがるかのよう。JALのチャーターフライトはそんなことを気にもせずに一路フランスはパリ、シャルルドゴール空港へと私を運んで行った。機内での私は時の過ぎるのも忘れて過去の一年半のアルバイトの事などをゆっくりと想い出していた。思えばこんな途方もない事を胸に抱くようになったのは何時頃からだったろうか。もともと私は旅が好きだった。高校での小さな電車旅行やツーリングが重なり合い、しだいにオートバイでの日本一周旅行へと私をかりたてて行った。そして高校二年、オートバイでの日本一周を終えた時。その頃からだったろうか。私は外国に行く夢に取りつかれ、なによりも夢に熱中していった。
旅はイコール青春の彷徨である。私は考える。旅に出れば自然の美しさ、人情の温かさに接することができる。

と同時に自然のきびしさも知り、自分がなんと小さな存在であるかを知らされる。人生のきびしさを旅を通じて知るとは、私達、青春のまっただ中にいる者にとってどれだけプラスになるか計り知れない。とにかく「やれるか、やれないか」を論ずるより、「やるか、やらないか」ではないだろうか。とにかく大学に入ってから一年半はバイトを遮二無二した。とにかく金を貯めること。それしか頭に無かった。アルバイトはきつい、日々の生活には充実感があふれていた。

いざ出発の時、見送りに来てくれた友人達とも会えず「加藤」と呼ばれるより「ニッポン人」と呼ばれる方が多くなるだろうと思いつつながら機内に乗り込むと、稲野さんという法政の三年生といっしょになる。二人の行き先が異なるまでいつ別れるかわからないままに、その日、その日を共に歩き回ることになる。

さっそくフランスの空港からパリ市内に入るのに一苦労、三十分位バスを探し求める。パリに着くなりメトロのアンキャルネ(十枚つづり)を買い込み。さっそくその日の宿探し。安宿ペンションを探し出し、いざパリへ、シテ島・ノートルダム寺院・市庁舎・ルーブル・カルセル凱施門・コンコルド広場・シャンゼリゼ・エトワール凱施門・エッフェル塔、初日はただ着いたばかりのいきおいにのり足を棒のようにしてあさり回った。シャンゼリゼではビールを飲み、ルクサンブル公園のすばらしさ、エッフェル塔から眺めたパリの夜。その夜

はそんな事を思いながら眠むりについた。

二日目、まだ着いた喜びに酔いしれ、朝食をパンと牛乳だけですませ、オランダへ行くため、北駅のロッカーに荷物を入れ、オデオン・モンマルトルの丘・サクレタル寺院・モンマルトル墓地・ムーランルージュ等を、初日のようにメトロも使わず歩き回る。ムーランルージュの路地の、昼まっからの立ちんぼうには驚かされる。この日はハーレムのような所に入ってしまいあわてて帰ってきた。

パリは帰りにのこしておきいざオランダへ。ヨーロッパの電車はコンバートメント、トイレはついているが水が飲めないにおどろく。ヨーロッパ全土にわたり言えることだが日本のように水がやたらと飲めない、私はいつも2Lの水タンクを持ち歩いていた。コンバートメントに素早く乗り込み、カーテンを閉め、すぐに眠を振りをする。これは、人が入ってきて眠れなくなり、電車での一泊が徹夜とならないための生活の知恵である。それにもめげず、アメリカ人の男女が入って来たのである。なんとなく、雰囲気話話したがっているような感じを受けたが、まだなんとはなしに、日本人の島国根性の外人コンプレックスのため話ができなかった。ヨーロッパに着いての数日は、やはりなにをするにしてもやや俯き加減、でも帰る頃には、グッと胸を張って歩いていたので

電車の中で一夜を過し、いよいよオランダへと入る。日

記には、「風車を車内で見ると。全く広い、牧草地の割に牛が少ない。やはり花が多く、地面と水面が三十センチと離れていない、水の中に土を入れた感じがする」と書いている。

アムステルダム市の市内に入る。町は玩具(おもちゃ)のように小さく、運河が網の目のようにはね橋の下を流れている。YHに宿をとり、町を見物する。驚ろいた事に、ノミの市の傍の教会がヒッピーに開放されごろごろとしていたり、話をしていたり、マリファナかハッシュシーを吸う話をしていた。そんな中で一人のヒッピーが悲憤を弾いていた。話によると、日本のヒッピーは、ただのらりくらしとしていて、根底にはなにもないらしいが、こちらのヒッピーはレベルが高く、又会員証のような物があると、私は見えないが話に聞いた。

その夜、東北大・横浜大・法政の人。そして、十九才で、イギリスへ一人で勉強に来ている日本の女の子(他にも日本の女の子が、一人、又は二人位で旅をしているのには驚ろいた)との五人で、飾り窓へウインドーショッピング(この話の詳しい事はチョットとまずいのでカットさせていた)へ行き、帰って来ると、チョットトの際に法政の人のスリーピングシートが盗難に会う。後で聞いた話によると、アムスのYHはイタリアと同様盗難が多いとの事。いやな気分ですべて着く。

オランダでゴッホ美術館や、レンブラントの絵をいっまでも眺め(サロメを画いた絵が気に入るその前にいる

こと数十分)、北海の海を眺め、マドローダムミニチアタウを見た事などを想い出しながらドイツへと足をむける。ミュンヘンでは、着いて早速朝食からビールと白ソーセージ、そしてパンを食べ、少々朝からいい気分、YHに着くまでにイスラエル人とアメリカ人と知り会う。二日宿をとったミュンヘンとも、アメリカ人とアドレスを交換した後離れ、ノイッシュバンシュタイン城のある、フェッセンへ向う電車の中で、日本女性の二人旅に会う。YHでは、会社をやめて、四ヶ月間旅行をしている日本人にも会う。このように日本人がゴロゴロしているのには驚ろいた、石でも投げようものなら楽に日本人に当るのではないかと思ふ程である。ロマンテッシュストラッセを走り、ライン下りをし、ハイデルベルグを見る。最も心に残るのはモーゼル川のワイン祭である。ワインを約七十円で飲み、皆が男女入り乱れ、踊りを踊る。やはり祭はいいなあ、と思っている時、またまたハブニング、フランス人が、ぜひ写真を撮らせてくれとのこと(その時、私は二人の日本人と話をしていた)なぜか、と聞くと、ジャポネはカンフーだと言って写させてくれときかない。ヨーロッパでは大半の人が、日本人は空手をやっているの信じている。(中には、カンフーと空手を違う事を知っている人もいるが)写真を撮るとモーゼルワインを御馳走してくれた。だが、うまく写せなかったか、フランス人はけっこう良い気持ちになっていたから。

スイスではレマン湖で、ドイツで会った人と待ち合わせ、ユングフラウヨッホまで一緒に回った。ヨッホのアイガールの北壁は下からは見えませんが、頂上ではガスに囲まれ一寸先も見えない。だがマッターホルンは絶景かな、絶景かな、雲一つ無いの上から麓のツエルマットまで山を下って来た。だが屋メシでドジを踏んでしまおう、スイスなど、北は物価が高いので、ストアアでパンと飲み物、と食事は決っていたので、何時もの通り飲み物を買おうとすると、「コーヒーマルク」と書いてあり、「ドリンク」と値段の横に書いてあるため、店員に「ドリンクか」と聞いてみると、Yesとの答が返って来た。私は、コーヒーマルクだと思ひ込み、買っていざ開けてみると、コーヒーマルクに入れるミルクなのである。「ソリヤ確かにドリンクはドリンクだけど」などと、ブツブツ言いながらも栄養になると思ひ、根性で半分まで飲む、五〇〇シーシーのパックなので二五〇シーシーは飲んだのです。そんなことを電車の中で想い出しながら、次に向うイタリアのことを考えた。

イタリアではピサやトレビの泉・スペイン広場・ホロローマロー・パチカン市国等を見、本物のピザを食べ、スバゲッティを所望する。

イタリア人やスペイン人は大変陽気者で、アンアンか何かに乗っていたカプエーに入り、エスプレッソをたのみ、その本の写真を見せると、店中てんやわんや、その本がグルグルと店中を走り回り商買所では無くなった。

だが、その反面カップライ等は南へ行は行く程日常茶飯物乞いは多く、教育の無さなのか、過去の繁栄を持つ行詰った国という感じを受けた。

旅もいよいよ後半、ギリシアへと足を向ける。船の中で、フッと今まで見てきた国の事を思い出す、ドイツ、スイスは大変親日的で、「キャンアイヘルプユー」と声を掛けてくれる、反面イタリアは観光で食べている町である、だから旅行者、特に日本人は大変良いカモとみえ、数ヶ国語を平気で話す土産物屋、ボンビキが執拗に食いついてくる。日本人は、日本で十円の釣りを間違えても青筋をたてる人でも、外国へ出ると借りてきた猫のようにおとなしい。フランス人は巧みに騙し、イタリア人はすぐにはれる騙し方をするとかよく言われる。これは日本人が国際感覚に欠けている為だと痛感する。大半がバックで来た人たちが、外人に日本のこのようなイメージをあたえてしまいうように思われる。バックといえば、暑い中をやっとの事でコロセウムまで歩いて来て、座っていると、バックで来た人達が来て、一分位ガイドさんが説明をして、その後「でわ、ここでお写真の時間を五分程とりましょう」と言っていて、その人達は写真を撮り、すぐに去って行った。あの人達は日本へ帰り、私はコロセウムに、イタリアへ行って来た、と話すことだろう。老人なら分るが、二十代の若者が多かった。自分で歩きもせず。私達でさえヨーロッパが解り切れないのに、人々に触れず、失敗もせず。だが、きっと彼等は話すに違いない。

ない、ヨーロッパはこんな所だったと。そんな所に日本人が良いカモにされる原因が在るのではないか。話が脇道に逸れたが、この般内で偶然に、大学の教授の松田さんと知り合った、気さくな方で色々教えていただいた。

エーゲ海の海はガラスのように美しく、アクロポリスは過去のギリシアを、無言のまま見る人に伝えていた。ギリシアは大変物価が安く、少々贅沢をし、夜は有名なしいレストランへ、ギターの弾き語りがありなかなかに良い所。又そこで出たメロンがすごい、スイカよりもでかく、味は抜群。

アテネでは、どこで覚えたのか、日本語で「私、友達」と言いながら、「良い女がいる」と男が話しかけてくる。アブナイ、アブナイ、しかしそんなに私の顔が好きに見えるのかな、少々悩み始める。

イタリアへ渡るのに、スチューデントフライトを予約、「オンリーワン」と言われ、ホッと一息、だがミッドナイトの二時出発にはビックリ、松田さんが夜中まで外のカフェーに一緒にいて下さる。

機内に入り込み、二時間程でローマに着く。そして電車に乗り、スペインまで、イタリアからフランスを通って行くのに、食料はリングゴ二つとフランスパン半分、それとジュースが一本、の強行軍。電車では、日本の女の子とイギリスの男の子のアベックが同席、イギリス人は四ヶ国語と日本語が話せる。大学で日本語を専攻してい

るとの事、東大か名古屋大へ留学すると言っていた。

そんな事がありながら強行軍はなんとかスペインに入る。ピレーネ山脈を越え、ヨーロッパではなくなる。その言葉通りこの国ほど強烈な個性を持った国は少ないだろう。強烈な太陽、澄んだ青空、情熱的なフラメンコ、闘牛、そして荒涼たる高原、赤茶けた山肌は独特の風景を醸し出し、それはまるでアフリカの平原を連想させる。列車の窓から飛び込んでくる風景は、あきること無く私の目に写って来る。オートバイで走りたい衝動に駆られる。

こんな景色を眺めながら電車はマドリッドに着く。ここには、町の角という角には、機関銃を持った警備の人がいて、十一時頃になるとベンシヨンの門を閉めてしまう。勿論中の人も出る事はできない。フラメンコを夜の一時まで見て帰ってくる時などは、外で手を叩き、地獄の沙汰も金次第、そこはチップを渡し開けてもらおうです。門などを叩こうものならバンダの顔になる事間違い無し。日本でこんな事が考えられるだろうか、やはりポルトガルでもめ、スペイン自身の革命の真最中であるためであろうか。

マドリッドは近代都市である。スペイン広場の有名なドン・キホーテとその従者のサンチョ・パンサの乗馬像が愉快だ。その背景には高層、マドリッド塔ビル(三十階)が聳えている。それでいて共産圏を除いては、欧州一の低所得、低物価とはこれいかに。恐らくスペイン

の国民性にも負っている所が多いのではないか。だいたいの此処の人間はルーズと言うのか、のんびり屋と言うのか、商店、会社、官庁など昼三ノ四時間は休み、そして夕方から七時半頃まで働く、といった具合である。このおかげで、両替に、買物にと悩まされる。この休みの間、スペインの人達は、カフェーに行ったり、昼寝をしたり、公園を散歩したり、まるで何処かの隠居のようを生活してある。日本人とスペイン人を足して二で割れば良いと思ったりした。

闘牛を見たが、二頭目を殺す刃りて飽きてきた。小さい牛が出ると非難の口笛が飛び、闘牛士が跳飛ばされる。と、どよめき、又向って行くと、わんぱかりの拍手、そして滅多に無い事だが、一人が一発で殺した時など、真白いハンカチを振り、場内は興奮の坩堝と化していた。やはりスペイン人の情熱的な気性がそうさせるのだろう。物価の安いスペインで、貧乏旅行もやや羽を伸ばし、フランスへと帰って来る。フランスの宿は約千円のペンション、風呂が無く、結局日本に帰るまでの六日間入らずじまいであったが、ヨーロッパの気候はカラッとしていた為、毎日入らないと気の済まない私もあまり気にならなかった。

パリでは、法政の人や、明大の人、スイス、スペインで、偶然に会った人達と再会、驚いたのは、日本のバイトで知り合った駒大の三年生に、大学の学食でバッタリ、人前も憚らず大きな声で「アー」

パリの動物園に入り、パンダ等を見ていた時、横にいたフランス人の子供が、なんと檻の中の動物を見ず、私の顔をジッと、まるで檻から逃げ出した動物でも見るかのごとく見ていたのにはなんともいいようのない気持ちになった。そんな事をしてパリでの数日も、帰りたくない気持ちでいっぱいなのに私も構わず瞬間に過ぎていった。帰りの便に、途中で偶然に一緒になった人達と供に、色々な想い出を残し、何時か又来る事を夢見ながら乗り込んだ。

機内では色々な想い出にふけていた。どんどん近づいてくる日本とくらべながら。

この旅をして、日本の女性はやはり良いなあ、と思わされる事が何度もあった。実に外人は、レディーファーストにあぐらをかいているのである。ドイツでは、私が座っているとオバサンに、「私が座るのだから」と今にもかみつきそやな顔を叩かれびっくりした。フランスのメトロでは、私の目の前で紙のバッグがたおれた時、そのオバサンは私の顔を見、拾うまで待っている、私は拾うのが当然という顔をされたのにや反感を持ち、どうなるかとズツとその荷を見て何時までも拾おうとしなかった。すると、別の席にいたオジサンがわざわざ拾いに来た、いやまいったまいった。

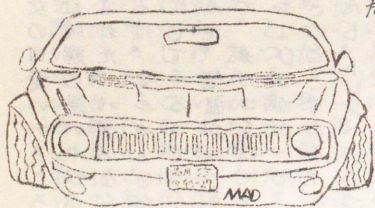
だが私達も見習わなければならぬ事もあった。人々はチョットでもぶつかると、バルドンと、又はゾーリーなどと言葉をかけ合ひ、でも日本のアノ電車じゃなあ、

「インがとてもセンス良く合っている」と一言そのような事もいや味も無くスツと言えり外人のセンスの良さに感じ入るが、バスストップまで段々話が出来なくなる。無論単語が出てこないのである。仕方無しに泣きの涙で「サヨウナラ」と言って別の両に法政の人と乗りこんだ。

スペインで会い、フランスで会った人が言っていた、「君とは何時か何処かで会えるような気がするよ」と。住所も名前も聞かず、だが私もそんな気がしてならない。何時か何処かできっと会えるような……。

世界は大きい、あまりにも巨大すぎる、色々な生活があり、風習がある。大地は一人の人間の力がいかにひ弱なものであるかを痛感させる。

そして私は新たな旅の始まりをこの時から再び未来に向かって歩みださなければならぬのだ。



乗ってる間中言っていなければ。

又時差にも悩まされた。イタリア、スペインはパリなどと違い一時間時差があり、ギリシアはそれより一時間時差があるので。又、イタリアの電車は一時間遅れようがヘーキ、ストの時などは何処の駅へ着くのか分りやしないのです。

外人の男女にも色々と考えさせられた。メトロの中の恋人どうしのキス、別に人もじろじろ見たりしない。私も始めはビックリ、でもそれが当然のように思えてくるのです。又老人が手をつなぎ合って公園でよかを楽しんでいるのは微笑ましいかぎりなのです。

旅をしていて、なぜこんなつまらない事をしているのだらうかと思つづく思ひ事が幾度かあった。そのたびに暖かい人々が心の支えとなった事はいうまでもない。

そして異国にあって日本を想う時、日本こそ世界で一番良い国である、と痛感せずには居れなかつた。日本人の誇り、それは今まで感じた事の無いものである。

しかし、言葉の知らなさをつくづく思い知らされた事があった。生活してゆくだけなら何とかなるが、他人に親切にしてもらった時、ただ「サンキュー」としか言えない、本当に感謝しているのに「サンキュー」一つしか言えないまどろっこしさに自分ながらいやになる。YHを出る時、女の人が雨の中で荷物を持ってずにこまっている時、日本のナイトはさっそうと「ブリーズ」と一言バスストップまで持っていける。その女の子の言うことに「私のカサのグリーンとあなたのバックパッキングのグリ

日記より

根釧パイロットファーム

「北の詩」より

畜産三年 木原幸男

私は敢えて、実習記とは書きたくない。それは目的の違いからくるものである。自分をためしたかった。自分が一ヶ月余だけ頭張れるのか、ただそれだけである。朝露を踏んで私は牛を追った。左に知床、右に国後、牧場の朝は早く、真夏というのに息は白い。「ペー、ペー」と叫ぶと「モー」と返事があつた。山のこだまとはちょっとちがう。

搾乳牛二十一頭の中にジャージー種が四頭いた。私はこの中で、入り口の右側の最初の彼女が好きだった。乳房にふれると、私の顔をジッとみつめ、アイシャドーを塗った大きな目を瞬いた。乳房のはりは文句ない。しかし一つだけ欠点がある、体高が低いと言うのか、肢が短いと云うのか、いつも乳房を真黒にして帰ってくるのだ。バケツ一杯がすぐに泥水に変わった。「ああ、またか

恋の痛み

畜産四年 S . U

よ」とぼやいてもみたが、ここが彼女の可愛いところでもある。言わば泥の妖精だ。中には肢癖の悪いやつがいて、二回ほどバケツをひっくり返された。バケツならまだいい、シッポで顔に化粧をされるは、ミルカーをたおされるは、せつかく乳房をきれいにしてやるっていうのにあんまり感じやすいのも考えものだ。気温がいつきに上って、乾草日和。朝食をすませて、タバコを口にす。とたんに電話のベルが鳴って、およびがかった。上神牧場の乾草の応援に来てほしいとのことである。ここ吉田牧場はサイレージ中心であったし、トレンヘチのつめ込みもおわっていたのでさっそく出かけた。ハーベスターがまるで羊羹を切ったように、梱包を造りあげる。仕事はその梱包をトラックにつむことである。六段、七段、そして八段、ここが男のみせどころであるとおもいきや腰がくだけてひっくり返った。見上げた空は青く澄んでいて。仕事を終えて、草地の上に腰をおろし、みんな酒を飲んだ。うまかった。いろんな話が出た。そして内地の話もしてやった。だからこうして打ち解けることのできた自分に満足している。吉田牧場に帰ると旦那さんがこう言った。「どうだ、ゆるくないべ」って。たしかにゆるくない。しかし、一生懸命頑張った自分に満足している。

「疲れた」。私の日記は全てこれで終わっている。

し、私自身も君の顔を見ると息がつまる思いになり、言葉としても言えなかった、君は私にとって、あまりに高貴な重すぎる存在であった為かも知れない。君が一度私に軽く「私はそんなに良い女ではない」と言った事があったが、私にはそんな事は胸中には全々なく、むしろ君は偉大な私の理想の女性として作り上げられていた、この時は高貴なふるまいをしてほしかった。友人が君の名前を言うと、僕はその場から逃げて行くようであったし、逃げなくとも自然に口を閉じていった、他人から見ると、おまえは馬鹿な男、君だけの女性ではないと批判するかも知れない、君にも迷惑だったと思う、私自身もわかってはいた。でも、この時はどうしようもなくなくなっていった。私は君に対する自分の素直な気持というものは自分に受け入れたかったし、私みたいな男にはこれが唯一の君に対する気持をうちあける方法だったかも知れない。しかしこれまでの思いも、雪なだれののように、冷たくくずれていった、それはある友人からの一言「彼女は思っていた人がいるぞ」という言葉であった。私が覚悟していた結果よりもあまりにも冷たく、きつく重かった、また、この日は私の誕生日でもあった。友人から聞く言葉一言一言が私には苦しく、体の力がぬけていく私に追うちをかけるように、重ってきた。しかし、この時は何も言えなく最後まで君の話聞くだけだった、内心の私は自分のこれまでの気持を言いたかった。君を無理しても奪いたかった、でも友人の言葉を聞いてみると私は

私は君を恋した、私の胸の中には君だけしか住んでなかったし私自身も君を受けやすいようにしていた。そして君自身が僕の時計であり、君の時計によって私の一日の行動は左右され、私自身もこれに溺れていて私にはそれだけが幸せになっていた。君が明るく楽しく見える時は僕も明るくなり、君が苦しく沈んでいる時は僕も君を楽しくしようという気持があったが、しかし、その反面、君と同じように重苦しくなり、自分自身驚くほどに、男として存在がなくなり、君だけしか考えられない、不安な盲目の気持になっていった、自分でもうおさえきれない、深い、深い谷へ落ちていっていった。君に逢える予定なのに、逢えないと、私事みたいに考えこんでいった、しかし反面私自身の明るい性格を出して、明るくふるまう事もできた、君を忘れる事ができた為であったと思う。しかし君が来ると明るくなれるはずなのに故意に明るさをかくし、人を避け室の片角みで、見つめていた、しかし胸の中は熱くなり心臓の鼓動ははっきり外観からわかるほど高まっていた。しかし君には、わかりえなかったであろう、わかってもらえないような自分でもなく、また、私の存在は君にはあまりに小さすぎたかも知れない

その友人に言ってもわからない、また、わかってほしくない私だけの秘密にしたいと思えてきた。そして友人は色々良く知っているらしく、君の事をうまくしようとしているようであった。私もし言ったら友人も気をまわすようであったし、私自身も悪役になりたくなかった。なりたくとも私の性格からはとうてい君につらく当ることとはできなかった。ただ静かに涙ぐみながら聞くだけであった。聞く間には、君の昔僕に気軽に真からはなしてくれた頃の顔、笑っていた頃の顔がうかぶだけであった。最後には遠くへ去っていく君の顔がうかぶだけであった。そして話しが終った時はもう自分に自信がなくなり、苦しみからのがれようと、田舎に帰ることを決心していた、またすべてを忘れること、頭を冷すことも目的であった、でないとも君に逢える勇気がなくなっていたから君にもいや君たちにも迷惑をかけたくなかった、私自身も美しく去りたかった。そして田舎から帰ってきた時は大部傷がなおっていた。これで私は本当に一人になり、全て失ったという気持は深まっていたが、しかしこれで良い私はもうこれ以上苦しむたくもないし、君も苦しめたくない、私は新しく又昔の私のように帰るつもりです。しかし私はこんどの君を恋したという事実は私のよき思い出として、とっておくつもりです。

日記より

随想

発つ鳥あとを濁す

畜産四年 小栗 実

僕の農大での生活もあと二、三ヶ月でお終っちゃりか
らもう恐いものなしだ。だからこれからしゃべることは
すべてホンネ、タテマエぬきでガンガンいっちゃり。

僕は三年四年とクラス中央委員をやったのね、一年
二年はというともっぱら遊び、当然でしょ、僕は東京
だもんだから、近所にワルがゴロゴロしてたし、それに
高校時代から銀座や新宿、渋谷は庭みたいだったし、ち
っとした顔になっちゃってたからね、でも大学へ入って
からは山手線の真中、バイトで金をためて赤坂なんて行っ
ちゃってね、ビブロス、メビウスなんて今でもあるんじ
ゃないの。だから一年二年はもうダメネ。だから自分が
農大生かかって感じたのは三年になって、研究室へ入っ
てからね、三年になってひょんなことから、いまだによ
くわからないんだけど学生会の古沢が「君は小栗君と言
うんでしょ、クラス委員に立候補してくれないか」って
言われたわけ、僕あまり学校に来てなかったからクラス

あの「小栗君、がんばってね」の一言だったね。野郎共
はセンセセンセって男めかけみたいセンセの後にべっ
たりで頭にくたね。でも僕は育種だけど、先輩も助けて
くれたし、正ちゃんやナベさんも以外と理解あったみた
いだし、けっこうがんばれたね。これ読んでる皆はまだ
一年以上あるわけだけど、一言濁すと、まあやりたいよ
うにやりやいいわけよ、農大の伝統なんてアホらしいこ
といわれないでさ、伝統なんてずっと昔の見たこともない
卒業生の学生時代の生活状況でしかすぎないんだし、今
年は昭和五十年だし、満州農場がどうのこうのって、ア
ホみたい。社会は流動してらんども、大学だって社会
の中に存在する以上変革して当り前、停滞は社会からの
離脱だよ。僕たちは社会の中の大学、それも私学という
自由な立場にいる学生なんだから、現代社会の私大教育
の在り方なんて考えてみると、今の僕たちの生活の一コ
マーコマ、授業に出ること、それをさぼること、ギャン
ブルすること、スポーツすること、音楽をやること、お
しゃべること、車のりまわすこと、酒のんで慕れるこ
と、友達と会うこと、女性を好きになることそしてSB
Xすること等々がみんなすぐく重みを増してくるんじ
ゃないかと思うよ。農大は今の学生、僕たちや君たちのも
のなんだから、OBはたまに来て、自分の学生時代をな
つかしんでりゃいいのよ。僕が一年のときはひげ面のこ
きたない学生っぽばかりだったんだから、でも今はいか
した男や女が大勢いるよ、いいことじゃん。男と女が肩

委員なんてあるのよく知らなかったんですよ。でも僕は
小学校の時からあの委員でいうやつ、なんでもいいから
一度やってみたかったんで、「うん、いいよ」って言っ
ちゃって、まあ、十年来の夢がかなうし、教段でふんぞ
り返って漫才やってりゃいいし、第一、いつもいじめら
れてきた先生に、まさか大学へ来てかたき取れるとは思
わなかったからひき受けちゃったわけです。いちおう対
立候補なんか出てね、でもメデタク当選、そして最初の
問題が学費値上げ、ひどかったですよ。クラス代表とし
て学校当局の偉いさんと会ったわけね。学長の平忠は風
呂の中の屁みたいだし、学生部長の杉さんはコンニャク
西郷常務理事は腹黒ダヌキ、教授会の議長いまの学長の
鈴木はキツネのあかんべ、こうそろっちゃね、こっちは
にきび面の真面目な美青年ぞろい、手玉足金玉まで取
られて、けむにまかれて、ごころうさん。まあそんな調
子ですよ。僕は怒ったね、スピッツみたいにギャンギヤ
ンほえましたよ。しかしね、学生はついてこないし、学
校側はのれんに腕おし、僕はマークされてるさいハエ
がたかってくるし、学生会はマイク片手にわけのわから
んこと言ってるし、農友会の連中は農大精神だの質実剛
健だのアホらしいこといつてるし、運動部は馬鹿の一つ
おぼえみたい在先輩オスオスだし、やってらんねえよ、
まったく、でも自分としちゃ学費は高いし教務課には頭
きてるし？ これ以上じゃ遊びにも行けないからね。そ
の時のただ一つの励みといえはクラスの女の子たちの、

組んで歩いてるなんてあの頃見たことなかったよ、今じ
ゃあちこちで見かけるからね、にくいねこんちきしょう
石投げちゃうよ。女もきれいになったし、男もいかして
きたし、あとは頭の中身だけだからね。以前は中身だめ
と思おたおだめ、ていうのばかりだったからね。もとも
と思考というのは流動的なものなんだから、その思考の
産物である活動状況が年々変わるの当然のことなんだよ
ね。それを嘆いているのは思考の停滞しているスクエア
な唐変木だね。君達は自分達の好きなように、活動しや
すいように、生活しやすいうちに、農大の状況を変革す
べきだね。常にドラマの主人公は君達なんだから、もち
ろん秩序ある変革をね。でも職員をないがしろにしちゃ
いけないよ、彼らにだって君たちと同等の権利と義務を
持っているんだから、できたら彼らと一諸にやるのがい
いね、ちょっとかかったらいいけど、僕はもう卒業しちゃ
うから、農大がこれからどうなるかなんて知ったこっちゃ
ないけど、良くならないまでも、現状に甘んじていなく
て、なんとか変革を願っている学生が後にいるから、そ
いつらががんばればいい線いくんじゃないの。でもきつ
いけどな。

まあ最後だから、研究室のこと、ホントのこと言う
とね、気をつけた方がいいよ。聞くと入るじゃ大ぢがいで
からね。うちの育種も問題あるけど、僕は研究室見まわ
したところ一番ましだね。僕は育種の奴で後悔してるや
つ一人もいないと思うよ、ホント。うちは先生からも室

動物の遊び行動

畜産二年 杉 山 康 雄

動物にはいろいろ人間と似かよった行動型をとるものがある。

例えば、機嫌を取ったり、歌をうたったり、遊んだり、とぼけて見せたりするというような行動型である。この他に例を取ればきりが無いが、これらの行動は生得的行動、また習得的行動、また特別な場合として異常行動に分けることができる。

ではこの様な行動がどんな形で、いつどこで行なわれるかは、動物の種類によって異なってくるものである。

ここで一番興味ある行動型は「遊び」というものではないでしようか。

人間にもっともちかいと言われているサル類などは、各地の野猿公園などに行けば子ザルなどが人間の子供をよくからかって泣かせてしまうという光景が目に入る。

これも一つは子ザルがじゃれて遊ぶという行動である。泣かされた子供はとんだ遊び道具ということになる。

遊びという行動型はサル類に限らずどの動物にも見ることが出来る。しかしこれが子供と大人とを比較してみるとだいたいニュアンスが異なってくるように思える。

子供時代の遊びは、その動物にかくことのできない行

費を取って、一諸に室を運営しているただ一つの民主的な研究室なんですよ。どこの室も先生を中心にした絶対専制君主制を行っているからね、繁研なんかもうタイヘン、学費払ってヘイさんの肩のみしている馬鹿がいるくらいだし、第一と第二の仲は最悪だし、第一の卒論はバカの一つおぼえみたいなのに全員過排卵、もうまっ青だね。衛研はオーミの一声だし、診療所は獣医くずれのためり場だしね。飼養研は先生たちとおままことじゃれ合っているし、乳研はよっぱらいのお相手だし、肉研はうすぎたないバラックだしね。育種はね、先生に面と向って反論できるし完全な多数決制だし、学生も先生も一人の室員として扱うことを原則としている唯一の室ですよ、でも一般的になまいきな所があるね僕なんかその源です。まあ、なれ合いじゃないことだけはたしかです。またそれだけ苦勞も多いけど。でも僕は先輩にも後輩にもめぐまれたから、ずい分楽しかったよホント、皆ももっと怒る時は怒って、敗けてもいいじゃない、今度はきつと勝てるよ、貴重な時間と金使ってきてるんだから、元とるまでがんばってくれよね、楽しくやりやいんだから、じゃ、もう消えるよ、元気でね、バイバイ。

動の型をしつかりと身につけさせるための教育的要素が含まれているように思われる。サルの群れなどでは親ザルは子ザルの遊びをだまってる見ているが、もしこれを人間の親のようにやめさせるといふ状態になってしまつては、子ザルはサルの群れの中の社会にとつて片輪という状態で成獣になってしまつとも考えられる。

サル類以外の動物についても同じことがいえるのではないか。

例えば子イヌや子ネコが親のシッポにさかんにじゃれる、また子供どうしのじゃれあいなどを見てもわかるように、彼らが成獣になつた時に必要な行動型になる場合が多い。食肉類などでは子供どうしがしのび寄つてお互いに飛びつくという行動。また子イヌどうしが走りまわるといふ行動型も、えものを走って捕るといふ行動型につながるのではないか。

また、すべての動物に言えることであるが交尾行動に似た遊びもよく見かけることがある。アカゲザルなどでは子供の時代に子どもどうして遊ばせないといふ、性交可能時期に達しても性交行動がとれないといふこともある。

これは人間においてもまったく同じ事がいえるのではないか。近頃の親たちは子供に、やれ勉強だ、やれ何んだといつて子供たちから「遊び」といふ行動を取り上げることが多い。

哺乳類動物においての行動型は、子供時代に一定の過程を経て確立することがわかる。この一定の過程が「遊

び」といわれるものではないか。

ここで一つ言っておかなければならないことは、「遊び」ということが動物行動学の立場から定義をくだした場合、全然わけがわからなくなる。遊びというものが一つの行動にあてはまるかどうかは、それぞれの動物の種の生息が完全に把握できなければ、判断ができないことではないか。

世界各地の動物園には、それぞれの動物舎に遊び道具が設備されていることが多い。

動物園のように、動物にとって、非常に閉鎖された社会は、動物にとっては生理的に不満が満ちみちている社会といえる。

例えば、オリの中を左右に行ったり来たりするものや、くるくる回りつづけるものというぐあいに行動に表われているのが現状である。

こういう行動も欲求を満たす、一種の遊びではないかと思われる。しかしこれは、やむにやまれぬ衝動を別の行動でまぎらわすものであるといえるのではないか。

動物園での遊び道具は、動物の体型や、行動様式を考へてやらなければいけない。

また一般に同種類において、若いものがよく遊び、成獣になるにしたがいやめてしまふというものもある。

今まで上げたように、いろいろな動物に見ることのできる「遊び」行動は、動物園や、家で飼っているペット類などでいろいろ見ることが出来る。そしてこれらの行

動は、どう見ても、生活目的のための行動にはみうけられない。

こうみると「遊び」という行動はすべての生活において、生活目的以外の満足を要求するものであり、この行動を行なう動物にとっては、自然の中で生きるための真剣な行動であるともいえない。またその反面、生活の中で生理的欲求を満たすものもあるように思える。

すべての哺乳類において、心理的満足を求める行動がある。それは家で飼っている、イヌやネコが主人に求めるものである。

ここで、人間、ホモ・サピエンスは、これらの動物とまったく異なるもっと高級な遊びを考えて行なう存在なのであるか。

子供が大人のまねをしてみたり、おにごっこや、ままたどというものをしてみたり、またサル類やその他の動物が行なうような、交尾行動のように、子供が性的遊びをすることは、すべてこれらの動物の行なう、遊び行動のそれと同じ基礎があるかもしれない。

ここで我々人間は、「遊び」行動たるものの必要性を考えなければいけないのではないか。

牛はつらいよ 大分慕情

畜産三年 今村 均

小生の実家は九州は大分県の国東半島にある杵築市というところにある。草深い山の中である。家の回りは全とていいいまどミカン山である。何故、うちが酪農をやっているのかと、ふと自分でも何かいけないう事でもしているように思うこともある。小生の家の規模は二十数頭飼養の小さなものである。

大規模経営者からみれば、趣味的なものであろう。しかし、親子三人肩を寄せ合って生きていくに十分な生活費をかせぎ出してくれる。小生の家では乳牛、ホルスタインを飼っている。学名、*Bos taurus domesticus* とい、家で飼っているのは正式にはホルスタイン種系雑種というものである。牛という奴はあの図体にもかかわらず、まったく小心物である。ちょっとした物音でガタガタするし、ふだん見なれない顔があると、すぐにも売られてしまうのではなからうかという「被害妄想」にかかるのである。

小生が久し振りに帰省してすぐ牛舎に顔を出すと、生意気な目で見るが、汚ない野良着で行くと、親しそりに鼻をよせてくるのである。可愛いというか、憎らしいというか、複雑な気持ちになる。搾乳の時でも、親父やお袋

が乳房をしっぶしてやると、気のせいか目が潤んでいるように見える。しかし、小生がやるとこの時とばかり後肢をふり回し、きわめて攻撃的になる。あの一撃をくらうと、二、三日は動けない時もある。もちろん、やられたらこちらもそれ相当の体罰を加える。しかし牛の身になって見れば、全く感触の違いが大事なところへのびてくれば、拒否したくなるのが当たり前である。また、牛が畜生と言われるゆえんは、エサを食う時である。舎飼する時は、自分のものは自分のもの、人の物も自分の物という感じである。牧草地において食わせる時もあるが大変である。人様なら腹八分目という一応の規準はあるが、牛の社会には存在しないらしい。そこにあるだけ食ってしまうのである。マメ科の牧草や野草を腹十二分目も食った日にはえらい騒ぎになる。ガスが胃に充満し、まるで風船みたいになり、あわれト殺場へと送られる。乳牛は、雄も雌もあわれである。雌は十九ヶ月令から二十一ヶ月令になると男を求め、たけりくるう。いわゆる発情である。しかし人様は、無惨にも人工授精なるもので、初交配というか初夜から見ず知らずの相手の精液を注入され、お茶をにごされてしまう。約二十日たてば、めでたく分娩であるが、子供の顔を見ることなしに離ればなれにされ、結果、母親は、我子を求めて一晩中泣き明すのである。そして年一回毎年くり返すのである。雌は母の跡をつけるから良いが、雄はみじめを絵に書いたみたいだ。エリート父、エリート母から生まれたた

ならまだしも、うちみたいところに生まれたら最後だ。七日十日して *Veal* としてうられていく。また何故うちで育てた牛がお袋になつくのかなと思っていたが、それは、生まれてすぐはなされて、最初の乳をお袋のませるから、この人が自分の母親だと思ってしまうのだと思う。小生はそう考えてくると、人様で幸せだと思ふ牛の雄にでも生まれていたら、精力絶倫な気品に満ちた *Bull* にはなれそうもないので、*Veal or Beef* として、諸兄の胃に入っていたかもしれない。

文明社会の中の

家畜と人間

畜産四年 武田 章

ブローグ
畜産の畜という文字、岩波の国語辞典によれば「牛、馬、犬、鶏などを飼う」「人間に養なわれている動物」という意味になる。

しかるに、「産」という文字がつくことによって「家畜を飼って人間の生活に利用する産業」ということにな

る。私たち人間は、産業ということになれば、その理性と知能を十分に發揮して、経済的利益を追求する。そのために、人間たちは、家畜を改良し畜産技術を進歩させて来た。

そのおかげで、私たちは、安い牛乳や肉や卵を得ることが可能になったのであるが、人間たちのこのひとりごつてな策略は、家畜からみれば口惜しいであろう。

一、家畜としての動物

日本にいる哺乳類は百余種、鳥類は日本で繁殖するものだけでも二百余种いるらしい。これだけの種の動物が日本にいるのに、ネコやイヌを除いて、動物園でも行かない限り、私たち人間の前にその姿はあらわさない。動物たちと人間は遠くはなれた存在なのである。

彼ら動物は、約数十万年前、人間がこの地球に生れて以来、人間とともに生活して来たのであるが、この長い歴史の中で、人間の変化は彼ら動物の変化と比較にならない程大きく、人間たちはこの長い歴史の中で、おそろしく巨大な文明をつくりあげたのである。このことが最大の理由となって、人間たちは動物たちと共存することができなかつたばかりか、動物を捕獲することから始まり、一部の動物たちを人間たちに奉仕するための動物につくりかえることになったのである。

種の起源には、飼育下に生ずる変異という項があり、その中には、今日見られる有益な品種の生れた理由につ

はあったが、そのとおりだと考えられる。

しかし、人間たちのつくった、この巨大な文明社会のつくりだされつつある環境の中で生れた家畜たちは、野山をかけまわっている野生の動物たちのように、このきびしい自然に対して、抵抗力があるなどとは予想できないことである。

私たちが豚小屋にいるランドレースを見た時、もっともすぐれた家畜の形質を持っていたことを感ずるであろうが、ローレンツ博士の書いているように、筋肉の軟弱化と脂肪の沈着によってひきおこされるほいてい腹、四肢の短縮という言葉も遠からずではなからうか。

三、家畜から見た畜産技術

戦後、しばらくすると、日本はすばらしく高度な経済成長をとげた。畜産の分野でも、一九六一年、農業基本法が制定され、安定した近代的農業をつくるという目的のもとに、「構造改善」がおこなわれ、一戸あたりの家畜の飼養頭数の増加の傾向をたどって来た。

その中で、日本では飼料の自給は不可能であるという想定のもとで、単独講和の遺産である、MSAの協定のもとに、アメリカの過剰農産物の買い付け輸入によって生じた発達なのである。

人間たちは、経済的利益を追求するあまりにつくったと考えられる自動給餌器、自糞尿処理施設などの体系的技術の自動化や大型機械の組織的利用などがおこなわれ

いて、「人間の累積的淘汰に力があり、自然な継続的な変異を与えるし、人間は自分の有用な方向にその変異を与えるし、この意味において、人間は自ら有用な品種を作ったといえる」と説明している。この中の有用な品種というのは、家畜を意味しおり、人間に対して経済的利用価値をもっているということと、人間の支配下で規則正しく、永続的に繁殖するものでなければならぬ。

つまり、原牛からホルスタインが、イノシシからランドレースが、野鶏からは白色レグホンがつくられたのである。これらは、人間にとって有用な方向の変異のみを人間によって重ね加えて作ったものであり、巨大な文明社会の中では、彼らは、動物というより、機械としての役割として貢献しているのではないだろうか。

二、自然の中の家畜

動物(生物)は、自然の環境に対して、完全に適応しているということはないのである。動物たちは、たえず、自然の変化に適応するために変異を繰り返して進化して来たという考えがある。

具体的に説明するならば、動物が地球に誕生したのは海である。それまではえらで呼吸していた魚は、造山運動がおこって陸地がでると肺で呼吸する陸上動物になる。そして、氷河期をむかえるようになって、低温にも耐える温血動物の哺乳類や鳥類が生れたのである。種の起源には、「自然は継続的に変異をあたえる」という言葉

ている。とりわけ、養鶏、養豚の部門では、商業的資本による工場生産方式もおこなわれている。

これらのことについていえば、確かに人間たちにとってみれば、たいへん都合がいいことかもしれないが、家畜にしてみれば、たいへん迷惑な話である。牛はせまい牛舎の中にとじこめられたままであり、たとえ運動場があったとしても、小学校の運動場の半分もない。鶏にいたっては、高々とつみあげられた箱の中で一生おとなしくしていなければならない。

これは基本的畜権の侵害以外のなにものでもない、最近になってまた、公共の福祉のみを強調しすぎる人たちがいるようであるが、基本権利の保障については十分考慮する必要があるのである。

山地酪農の創始者、猶原博士は機械されつつある酪農について、創造性を欠き、輸入濃厚飼料に依存し、乳牛は小屋の中で発育不良に育ち、病気、難産、不妊が頻発し、短命で乳牛の本質が発揮されていないことなどを指摘している。また、青空養鶏を研究している高橋氏は、鶏舎という建物をつくって、人間のみが、人間のみに都合がいいように鶏を飼養する方法であると定義して、人工的に鶏を機械化し、自然から遠ざけている。といっている。

四、人間社会と畜産と家畜

私は、教育実習で高等学校の畜産の教科書を読む機会

があったのだが、それを読んで、いささかびっくりした。というのは、牛乳の第一胃の働きのところで、莖葉中のセルロースが微生物と共同し、低級脂肪酸をつくる。ここまででは、私も知っていたのだが、そのあとに、非蛋白質ちっ素化合物(尿素など)を微生物体蛋白におきかえることによって、良質のアミノ酸組成の栄養に利用されるし、大量のビタミンB群の造成に役だつというのである。

これは、牛乳のルミノロジーといって、最近になって、家畜栄養学の分野で、研究されているらしいものであり、牛乳の消化の生理的機能を十分に発揮させる飼料構造を作成するために重要であることと考えられる。教科書では、濃厚飼料と粗飼料との関係と、それぞれの飼料の必要性と関連づけて説明していたが、濃厚飼料偏重の中で、粗飼料の重要性を強調していたように、記憶している。

高等学校の学習指導要項には、「家畜の特飼育環境および、これらの関係を理解させ、家畜の成育や環境を調節して、合理的に飼育する技術を得させる」との言葉から、すべてを論じることは、危険であるが、高等学校の畜産教育全体の中で、家畜の特性と環境についての問題が考慮されていると考えられる。

前記した、山地酪農や青空養鶏においても一頭一頭、の家畜の能力を十分に発揮させるために、山地や青空の下という、自然の環境に近づけることによって、一頭一頭の生産力を向上させるのである。小屋の中で育ったホ

エビローグ

最近、家畜の品種の改良と飼料に混入された薬剤などが起因して、豚からおかしな肉が出現した話を新聞で読んだのであるが、人間たちが、自分たちの利益のもとに研究し、押し進めてきた策略も、少しづつではあるが私たち人間にとって、手放して喜んでいられなくなっている。

人間のつくった文明社会という環境の中で畜産にかぎらずあらゆる方面でたくさん矛盾をかかえてきている。もっとも直接的には公害の問題であろう。つまり、私たちは、自然との戦い必要性は少なくなつたかわりに、人間のつくりだした環境に人間が苦しめられ、人間どうしの戦いがよぎなくされるような環境をつくりだしたのである。

私たち人間は、二〇世紀の後半の資本主義国、日本という具体的環境の中で生活し、科学、技術を進歩させて来た。したがって、このような時代と社会における生産様式に制限された自然科学上の問題が多く提出され、目にふれてくる。社会的、生産的要求、その時代の社会環境によって、科学者、技術者が、根幹から影響をうけるのである。このことはすでにエンゲルスマも指摘している。人間たちのこの二〇世紀の後半の資本主義国、日本のもつ社会的、生産的要求、これが私たちの身のまわりの畜産を発展させてきたのであろうし、私たち自身もその中に生活しているのである。私たち人間は、環境の欲す

ルスタインは、山地に立たされると動くこともできない。しかし、子供のころから山地で育てられたホルスタインは、自然に近づいた環境の中で、その家畜としての本性をいかしながら、人間の保護のもとに、強大な体と、不滅の繁殖力、生命力をやどして、その祖先を思いだしたかのように、野山をかけまわるのである。

このように、少なからぬ人たちは、輸入飼料万能の大規模機械化されつつある日本の畜産に対して、動物としての家畜の特性をいかした畜産を望んでいる。それは、高等学校の畜産教育をはじめとして、全国に、山地酪農家や有機農業をおこなっている人たちがたくさんいる。

しかし、このような人たちの訴えや努力も人間たちの幾世代がつくりあげた文明社会の中では、むくわれるためには困難であろう。というのは、この複雑な人間社会には、産業によって利益を得なければならぬ人たちが多方面に分化していて、それらの機能がもっと複雑な経路をたどって集合して、一つの産業をつくっている。そしてそれらが、また複雑な経路をたどって国家経済をつくっているのである。畜産もその例外でなく、家畜を飼う人たちのまわりには、飼料や機械を売る人、生産物を加工する人、行政を担当する人などがいて、畜産業を構成しているのである。つまり、家畜を飼う人たちが発想を転換したところで微力なのである。

そのままに家畜を改良し、畜産技術を発達させてきた。そして、私たち人間のつくった畜産という環境は、家畜の本性も無視した人間の利益だけを追求するにほかならない。

私たち人間にとってもっともおそろしいのは、現在、または未来の人間たちが、この文明社会の環境が欲するがままに、家畜がそうされて来たのと同じ経路をたどるのではないかということである。オートメーションの中で働く人たちが、巨大な組織の中で働く人たちを見るにつけ、私はそのことを考えずにはいられない。

しかし、現在のあるいは未来の環境をつくっていくのは、当然、私たち人間である。私たち人間は、家畜が人間によってそうされて来たようなことにはならない。なぜなら、過去の人間たちがそうして来たように、人間は自分たちがつくり出した環境は、自らの手で必ずや変革する力をもっているからである。

だが家畜は、そうした力をもちえない、なぜなら、家畜たちのまわりの環境は人間によってつくられたからである。私たちの中の多く人間たちは、その一人一人の力を合わせれば強大な力をもつことができる。家畜にはもちえないこの力を、平和で幸福な環境である文明社会をつくるために、最大限利用していかなければならぬのではないだろうか。そして、それは、人間がつくり出した環境、または、その環境をつくりだしつつある人間と戦うことからはじまるのではなからうか。

科学の階級性	井尻 正二	築地書館	S 47
進化論の歴史	八杉 竜一	岩波書店	S 47
日本独占資本と農業	重富 健一	大月書店	S 46
乳牛の科学	海津 元昌	典文協	S 48
畜産綜論	木村 和誠	養賢堂	S 21
畜産技術論	西田 周作	典文協	S 49
日本の山地酪農	猶原 恭爾	資源科学研究所	S 41
自然を生かした養鶏法	高橋 広治	典文協	S 46
自然弁証法	エンゲルス	国民文庫	大月書店
文明のおかしな八つの大罪	ローレンツ	日高敏隆訳	思索社
		大羽更明訳	

以上この文章を書くにあたって参考にした本

研究室だより

家畜育種学研究室

昨今、世界的食糧危機という言葉が頻りに用いられ、それに対応するかのよう、農政中枢機関の無能ぶりが指摘され始めている。農業という社会の根本としての産業が、賃金経済の統制の無さに虐げられ、高度成長を謳いあげつつ本来の社会のあるべき姿から日本という国を世界有数の無能的国家に育てあげた、限られた人種から、今日我々が耳にする政策は無責任極まりない行為に他ならない。

我々は学生という、直接農業を指向し、農業を学ぶ立場から、あらゆる限りの正確な情報を把握し、無意味に危機を叫ぶだけの政策と安易に国外より経済力を駆使して食糧を手に入れようとする、おざなりの政策に注視しなればならない。

今日、我々が農業という言葉に目醒めるまでには、畜産という分野は単なる農業形態の一部にさえ成得なかつた、元よりその土地柄風土に適した家畜の導入がなく、家畜の経済性を発現させようする要素さえ軽視されていたからである。しかし、育種という観点から最も注目されな

畜産二年 葉 伊 江 奈

朝の一ノ倉に続く道
 まだ明けきらないやみを
 ヘッドラが上へ上へと
 登って行く
 マチガを過ぎるあたりから
 空は次第に明るくなり
 俺達の足を急がせる
 東尾根を回り込むと
 一ノ倉の黒い岩壁が
 俺達の視界に飛び込む
 右に衝立、鳥帽子の岩壁が黒々と
 奥に滝沢がツルツルの
 スラブを光らせ
 左に二ノ沢、滝沢リッチが長大に
 俺達の前に立ちはだかる
 さあ登れ クライマー
 そして一ノ倉に勝て

ければならないのは、社会情勢に即応すると共に、さらに立地的に能力の秀れた家畜の確立である。
 当研究室においては、遺伝を基礎に、主に血液を通じて生理的方面より各家畜の内包する能力を規定し、免疫学的手法及び操作により生理的要因を追究しようとする試みである。しかしながら、内的条件以上に外的条件に左右され易い家畜の形質において血液を育種上の指標とする事自体、多大な難しさを秘めているが複雑多岐に渡る育種の分野においては、今後血液の占める位置は大になるものと考えられている。すなわち、体構成分であり循環物質である血液の性状を畜産学上利用しようとするものである。鈴木正三教授を室長に、田中一栄助教授、渡辺誠喜助教授、天野卓講師の諸先生を室員としておむかえしている。

家畜繁殖学研究室

通称、「繁殖」と呼ばれる当研究室では、よく室内でメスを炊いては、実験台が食卓に早がわりすることから「飯研」と呼ばれることもあるという。また暇を見つけては、キャッチボールに興じる室員も多く、暖かい午後の日差しの中、グラウンドに中庭に、顔に汗して動きまわる姿を見ることが出来る。
 こうしてみると、まるで暇な人間のあつまりの様に思

われるのだが、この研究室ほど、日常的に直接的に動物の世話に明け暮れる研究室も数少ないと思う。

毎日が研究に用いる動物の飼育管理に明け暮れる当研究室は、一戸健司教授、石島芳郎助教授、門司助手の指導のもとに、七十名を越す室員が在籍している。したがってその運営には牛・豚等の家畜を対象とする者、鶏・鶉等の家禽を研究する者、さらにウサギ・ラット・マウス等などの実験動物に情熱を捧げる者とに分かれ、各々独特の役割分担のもとに、それぞれの動物に愛情を注ぎつつ、日夜真理の探求を行なっている。

家畜繁殖学の主たる目的は、育種学的に作出された優良なる家畜、つまりは社会的に要求される家畜の繁殖率の向上、及びこれに伴う繁殖技術の向上にあるわけだが、当研究室における具体的な研究内容は、各動物ごとに多種多様であり、この僅かな紙面では説明しきれぬが、一応卒業年次生の卒業論文のテーマに準ずる為、その項目を目を通していただきたい。

家畜飼養学研究室

本研究室は、杉村敬一郎教授、伊藤澄磨助教授、栗原良雄講師を中心に家畜の栄養、管理、飼育と言う家畜飼養学の立場から諸研究を行っている。現在は四年生の卒業論文でござったがえしてありますが、毎日を諸先生、大

学院生、三年生と一体となって努力している。我が研究室は室員同志の団結と家畜に接する為、富士農場に於ける室員歓迎コンパ、サイレージ実習、群馬県畜産試験場に於ける畜産実習、並びに分析実験、その他多くの研究室活動の場を設けている。

現在室員数は、杉村先生、伊藤先生、栗原先生、大学院生四名、四年生十九名、三年生二十一名、二年生一名、特別室員二名である。

家畜衛生学研究室

本研究室は一戸健司教授を顧問にお迎えし、近江弘明講師、渡辺忠男助手の各先生の御指導により四年生二十一名、三年生以下二十名が一体となり活発なる研究活動を行っている。

家畜衛生は家畜家禽の生命を脅かす種々の健康阻害因子を除去し、家畜家禽の生命の延長をはかり、かつ生産を向上せしめることが主な目的である。

現在、本研究室における主な研究テーマは、家畜家禽の環境衛生について、家畜家禽の各種疫病（ウイルス性細菌性、内・外部寄生虫）に対する予防法、及び簡易臨床検査による早期診断法について、家畜家禽の糞尿処理についてなど、実際に即した研究を行っている。また近江弘明講師、渡辺忠男助手が兼務している本学家畜診療

所に於いても一般外来動物の診療を中心とした各種の研究が行われている。

その他研究室の活動内容は、年間行事として新入室員歓迎会、野球大会、収穫祭参加（文化展・模擬店）、親睦旅行、送別会、また週に一度の大掃除、定例会、ゼミナールなどがある。毎日の仕事として実験動物の飼育管理（当番制）、卒業論文の手伝い（三年生以下）、診療業務の手伝い（希望者）が行われている。

本研究室の大きな特色としてその研究内容は言うまでもなく、室員各人が衛生研の室員としての自覚と責任を持ち、一人一人がその運営に大きく貢献していること、また本学厚木農場との行き来が他にも増して活発であることである。このような多面的活動において、本研究室では学生生活の充実を計り、室員の個性を引き出し、その個性を持ちより研究室独自の個性を持つという事に我々は目標を置いている。

十一月には新役員も発足し、室員はますますはりきっています。

家畜経営学研究室

当研究室は吉村助教授をはじめ、小杉講師・石岡助手ら各先生と学生室員四年生十五名、三年生十名が一体となり活動しております。

その目標というものは、日本の現状に即した方向から畜産経営の経済性を追求しようとするものであり、まためまぐるしく変化してやまない現代社会の中にあって絶えずゆれ動く農業に対して真正面から対応できる人間像というものにおいてあります。早、換言すれば、明日の日本の畜産界をせおってたとうという使命感を持った連中の集まりなのであります。

研究の効率を高めるために、養豚・養鶏・肥育牛・酪農の四専門班に分かれており、それぞれの希望するところにはいり、各班ごとの独自の研究調査・討論等は勿論のこと、全体としての研究及び調査、ゼミ等が行なわれています。

また、毎年夏休みには研究室活動として、各地方に出張し、農村地帯の実態調査を行なっており、各班毎に農家を調査しその地域に於ける諸問題の追求・改善点の検討等前記のごとく畜産経営学の立場から解明していくわけですが、この分析を通じて現実と理論の相異を知り、同時に今後の我々の研究の基礎となるわけであり

ます。

このような研究活動はもろんのこと年間行事としての新入室員歓迎会・収穫祭参加・親睦旅行・畜友会ソフトボール大会参加その他諸々のコンパ等々、和気あいあいの内々に行なわれております。

このような多面的活動において学生生活の充実を計り、今後なお一層の飛躍をめざして活動しているわけであり

ます。
一・二年の後輩諸々も我が経営学研究室にぜひ一度気軽に訪れてください。

畜産物肉(卵) 利用学研究室

当研究室では、いたって親和的かつ家族的な雰囲気であふれている。

しかも、自由と創造とがおりなすアカデミックな研究の場として日や努力を続つけておる。しかしながら女性入室者数が、少ない為それだけが、唯一の悲しい事なのであります。女性の大量入室希望者を募る。男子は若干名募る。

年間予定としては、四月―「新歓コンパ」、十月―「収穫祭出品物製造(ロースハム・スモークドチキン、その他ウインナーソーセージ)十一月中旬―「研修旅行(本年伊豆北川温泉…呂天風呂有り)、二月―「追出しコンパ」

その他、年間を通して肉加工製造及び手伝い。数々のコンパ(酒量は少量)

「卒論紹介」として…
。凍結における肉質変化。

又、これらの研究を通じて室員相互の親睦を計り、人間形成を目的としていることも当研究室の特徴の一つであります。

本学卒業で乳業に従事している方々の親睦会である「楽乳会」の事務取り扱いに通じても先輩諸兄の御指導と御鞭撻をいただいております。

◎当研究室の主な行事

- 。ゼミナール
- 。新入室員歓迎会
- 。夏期乳製品製造実習
- 。収穫祭への参加
- 。秋の親睦旅行
- 。卒業論文発表会
- 。卒業生送別会



。肉を一四℃にて凍結を化学発酵させ、肉質の変化を調べる。
「就職面」では…
就職状況としては就職難と言われていても昭和五十年十二月十八日までに九十パーセントの入社が、決定している。

畜産物利用学(乳)研究室

当研究室は室長の山中良忠助教授、古川徳講師の両先生のもとに普通室員(四年生、八名、三年生以下十二名)準室員(一名)及び特別室員から構成されています。

本研究室の主な活動は乳・乳製品及び卵・卵製品に関する理化学的、細菌学的研究であり、無菌室、ドラフト室、ガスクロマトグラフィ、分光光度計等の完備された器具設備の利用により、一層高度な研究を可能にしています。

又、総合農産加工所における乳製品製造実習では、市乳の処理からバター、チーズの製造、練乳、粉乳製造及び酸乳飲料(チーステイ)等、各々の処理機械による「加工」、「製造」を行なっています。

最近は特に卵の分野への研究が進められ、卵・卵製品の分析と乳・乳製品への利用等の研究も行なわれています。

編集部では「ふじみの」第十六号の原稿を募集致しております。より一層充実したものとする為にも、名譽会員、特別会員、学生多数の御協力をお願いいたします。

記

募集期間 五十一年九月～十一月末日

要 項 ○論文、随筆、紀行文、主張

四〇〇字詰十枚以内

○写真カット、は随意

○表紙図案、三色以内

宛 名 東京都世田谷区桜丘一―一

東京農業大学畜産学科内

畜友会

ふじみの編集委員会行

発行日 昭和五十二年一月予定

応募原稿は一切お返し致しません

畜友会「ふじみの」

編集委員会

世(四)〇二二二一呼

昭和五十年度
畜産学科卒論題目一覧表

家畜育種学研究室

氏名	論文題目	教指導
7 浅野 芳郎	鶏と鶏における「Antigen」の共通性抗原について	渡辺
8 新井 千鶴	鶏の産卵生理に関する研究、特に抗脳下垂体ホルモンの作製について	渡辺
23 上原みどり	ウズラの産卵生理に対する光波長の差の効果について	渡辺
29 碓氷 日和	兎の血清タンパクの多型現象に関する研究	鈴木
34 小栗 実	わが国のホルスタイン種牛の血液型遺伝子構成	天野
44 太田越 翼	鳥類における白血球培養法の検討	渡辺
61 岸 文雄	野猪の形態学的・血清学的研究	田中
68 黒沢 彌悦	Q抗原の血清学的研究、特に家兎における抗体産生について	田中
71 小林 文男		田中

89 志田 恭敬	牛の血液型抗原による抗体産生の差異	天野
102 高橋 秀仁	綿羊の血液型に関する研究、特にR ₁ r ₁ システムについて	渡辺
116 中島 斉	牛血清アルカリ性ホスファターゼとインザイムとJ血液型システムとの関係	天野
152 水野 貴俊	雁鵝科における血清蛋白質および酵素の電気泳動的比較	渡辺
170 和田 勝	鳥類における抗体産生能力の季節的变化、特に日本キジとニワトリの場合	鈴木
176 須田 哲	ウサギの血液型に関する研究	鈴木
184 盛 安道		鈴木
家畜繁殖学研究室		
1 阿相 桂子	未成熟家兎の過排卵誘起とその卵子の移植	石島
6 秋元 忍	産卵鶏におけるメタリビューアによる強制換羽の研究	一戸
20 井上 繁	畜産物の価格変動に関する研究、1価格変動と経営の市場対応	新沼
24 上山 定利	ゴールデンハムスターの受精および着床におよぼす過排卵処理の影響	石島
59 菊地 史修	スナネズミの発情同期と排卵に関する研究	石島
74 河野 友宏	鶏における脳下垂体前葉プロラクチンの日内変動について	一戸
78 神門 英夫	キジ類の繁殖と卵の関係に関する研究、特に卵型・卵重と繁殖との関連について	一戸
86 斉藤 雅之	鶏におけるその下垂体前葉の投与が排卵におよぼす影響について	一戸
87 斉藤 能成	栃木県における肉牛生産の現状とその発展性について	一戸
94 鈴木 幾夫	ゴールデンハムスター1卵子の移動と分割におよぼす過排卵処理の影響	石島
95 鈴木 利枝	雄鶏における下垂体前葉プロラクチン価の日内変動	一戸
97 瀬名 康雄	鶏の産卵生理に関する研究、特に卵内容物重量比の日令による差異について	一戸
101 高橋真二郎	バナナの飼料価値に関する研究、特に豚肥育に於ける影響	伊藤
106 武田 章	異種精子の家兎卵子への侵入に関する研究	石島
109 千葉 優	若令肥育牛の去勢に関する研究	一戸

25 内谷 映美	家兎の卵子移植による産子数増加に関する研究	石島
30 海野 晃	鶏卵における眼検識別法	一戸
33 小川 保	乳牛における繁殖機能低下の要因と受胎率の向上に関する研究	一戸
40 大沢 昭弘	間性豚における組織培養と染色体について、特にその血液の培養と染色体の考察	一戸
41 大沢 恵	マウスの第二次性比の系統差	石島
42 大沢 正典	豚の去勢に関する研究、1実施日令の差異よりみた去勢後のストレスならびにその後の発育・肉質の比較検討	鈴木
43 大城 照政	ホルモン処理がホルスタイン種雄における肥育末期の産肉性に及ぼす影響	一戸
46 岡田 立晴	静岡県東部地区における乳牛の受胎率について	一戸
47 岡林 斎男	プロジェクトロンのによるラットの発情同期化に関する研究	石島
53 川満 信男	乳牛の早期妊娠診断に関する研究	一戸
56 神田 剛	ゴールデンハムスターの受精卵化における同期化および非同期化	石島

59 菊地 史修	スナネズミの発情同期と排卵に関する研究	石島
74 河野 友宏	鶏における脳下垂体前葉プロラクチンの日内変動について	一戸
78 神門 英夫	キジ類の繁殖と卵の関係に関する研究、特に卵型・卵重と繁殖との関連について	一戸
86 斉藤 雅之	鶏におけるその下垂体前葉の投与が排卵におよぼす影響について	一戸
87 斉藤 能成	栃木県における肉牛生産の現状とその発展性について	一戸
94 鈴木 幾夫	ゴールデンハムスター1卵子の移動と分割におよぼす過排卵処理の影響	石島
95 鈴木 利枝	雄鶏における下垂体前葉プロラクチン価の日内変動	一戸
97 瀬名 康雄	鶏の産卵生理に関する研究、特に卵内容物重量比の日令による差異について	一戸
101 高橋真二郎	バナナの飼料価値に関する研究、特に豚肥育に於ける影響	伊藤
106 武田 章	異種精子の家兎卵子への侵入に関する研究	石島
109 千葉 優	若令肥育牛の去勢に関する研究	一戸

167	165	144	143	118	112	107	101	98	96	69	64
吉田 稔	横山 和久	増田 行也	増井 重一	永山 洋	鶴岡 嗣久	谷奥 康彦	(高橋真二郎) (繁殖専攻)	田代 昌伸	鈴木 克美	グエン・キン・タン	清原 陽子
副 研究 影響について	主 バナナの飼養価値に関する	静岡県東部に於ける家畜ふん尿処理の実態	主 幼鶴における必須脂肪酸に 関する研究	鶏糞より発生する悪臭物質につ いて	鶏における音響の影響について	鶏における音質の影響について	主 バナナの飼料価値に関する 研究 特に豚肥育に於ける影響	主 鶏のエネルギー代謝に関する 研究 性別がエネルギー代謝にお よぼす影響	主 将来の日本の酪農観、特にその 乳牛観について	鶏雛における摂取蛋白質の利用 と摂取エネルギー源との関係	
伊藤	伊藤		杉村						伊藤		杉村

114	203	202	193	191	189	187	185	179
(鶴野 寿彦) (衛生専攻)	矢倉 明	増田 裕史	内田 昌宏	西川 正勝	村上 秀訓	沖上 芳幸	宮嶋 茂	秋本 仁一
傾斜草地造成初期における萌芽 の飼料価値		鶏雛における抗生物質の効果の 比較試験	Organenanti spezifi- sch protein aufbau in Beziehung zu Cler in Zalle behaltener Eneigie	主 鶏のエネルギー代謝に関する 研究 用途別による代謝エネルギー の相違	主 小国地方に於ける肉牛繁殖経営 と飼料対策	主 サイレージの調整方法と品 質に関する研究 踏圧がサイレージ品質に及 ぼす影響	主 乳用牛肥育における去勢時期の 影響 差異が体形及び肉質におよぼす 影響	主 穀類の豚肉生産におよぼす 影響 におよぼす影響 におよぼす影響
伊藤	杉村	伊藤		伊藤	吉村	伊藤	伊藤	伊藤

169	161	160	156	153	140	138	135	130	121	119	110
吉村 容一	山村香保留	山奥 隆	茂田井雄三	宮野 典夫	藤本 秀典	広瀬 美晴	平 栄一	服部 敏淳	西島 健夫	永山 善裕	千葉 克己
ラットの移植受精卵の発生にお よぼす子宮内環境の影響	家兔卵子の凍結保存(1780C) に関する研究 特に凍融解卵 子の生存性の検討	肥育牛における経管構造につ いて	雌マウスの性成熟におよぼすロ イヤルゼリーの影響	ライチョウの低地飼育研究	成熟ラットの過排卵処理に対す る卵巣反応の日令差	モルモットの過排卵誘起に関す る研究	豚における産子数に産体重なら びに性比の関連性に関する研究	鶏における明暗リズムの差異が 排卵におよぼす影響について	雌雛の種間雑種における繁殖能 力低下現象についての一考察	換羽現象求明についての一考察	鶏における下垂体の除去がその 生理機能におよぼす影響につ いて
石島	石島	吉村	石島	湯浅	石島	石島	鈴木	一戸	一戸	一戸	一戸

62	55	50	39	26	15	200	196	183	174
木下 辰己	河村 英一	加藤 勇	大川 栄一	内田 英磨	池上 文夫	高木 浩	小林 紀久	白井 芳夫	池田 実
副 題 鶏のエネルギー代謝に 関する研究 ギヤル代謝におよぼす影響	主 題 石川県における畦豆について (飼料価値について)	副 題 市販配合飼料の比較試験 レイヤルによる市販配合 飼料試験	主 題 幼雛における必須脂肪酸 に關する研究 組成に及ぼす影響	主 題 日本におけるミンクの飼養管理 の実態	家畜飼養学研究室	放 飼中の乳雀における生態学的 観察	雌 ウズラにおける下垂体前葉性 腺刺激ホルモンの日内変動に 関する研究	鶏 の産卵リズムと明暗リズムに 関する研究	
伊藤	伊藤	伊藤	伊藤	伊藤		一戸	一戸	一戸	一戸

家畜衛生学研究室

4	青田 茂	牛の子宮疾患に対するポビドンヨードの治療効果	近江
10	泉 修一	牛乳房炎の簡易臨床検査法による診断	近江
13	飯田 直子	踏みみ消毒槽に使用する消毒剤の有効限界について	近江 (鈴木伸)
36	小野 淳二	IBの培養細胞における発育と病原性について	近江
45	大野 正憲	公園内排泄犬糞の内部寄生虫について	近江
60	菊地 陽一	豚トキソプラズマ病の簡易臨床検査法による診断	近江 (鈴木伸)
63	清原 耕三	螢光抗体法によるNDの診断について	近江
85	座間 勝基	犬フィラリアの駆除法の検討	近江
99	田中 充	各種洗剤が犬の被毛に及ぼす影響	近江
100	田辺 茂春	病原細菌に対する家兔皮膚各部位の感受性について	近江
104	竹内 章	フィラリア寄生犬に対するSOTEXの診断的応用	近江

108	玉城 拡	牛の発情ならびに妊娠時における尿成分の変化について	近江
111	津本 辰己	戦後における肉牛経営の推移と問題点	吉村
114	鶴野 寿彦	傾斜草地造成初期における萌芽の飼料価値	伊藤
115	土肥 修	消化管内寄生虫に対する駆除剤ジソフェノール・メチリジン混合注射液の応用	近江
131	花本 弘道	野外におけるNDワクチネーションプログラムの検討	近江
142	細谷須美子	Mg感染鶏における血液性状について	近江
145	松本 重信	豚ジラミの産卵部位に関する研究	近江
151	三田寺 進	被毛の顕微鏡的観察	近江
155	村上 隆志	大腸菌感染鶏における血液性状について	近江
164	柳原 由史	鉤虫人工感染犬の一般臨床所見について	近江
173	加藤 良一	自然乾燥時における牛糞のアンモニア濃度の推移	近江
180	草深 明	肝蛭卵のフ化に関する研究	近江
		送風処理がブロイラー専用種の成長に及ぼす影響	近江 (戸)

畜産経営学研究室

3	青嶋 利夫	肥育牛の複合経営に関する研究	吉村
5	赤塚 健一	豚価における飼養規模の経営経済的検討	吉村
11	伊藤 邦夫	複合経営における畜産の経営設計	吉村
14	飯塚 一雄	群馬県館林地区における肉牛経営の現状と展開	吉村
18	石崎 栄治	軽種高生産における牧場経営の分析	吉村
35	小那覇安健	沖繩における自給飼料主体の肉牛経営に関する研究	吉村
51	片平 伸	養豚経営の展開と課題	吉村
52	川口 秀	大都市近郊養豚経営の成立条件について	吉村
65	工藤 元男	近郊都市における養豚経営の研究	吉村
66	倉内 昭	肉牛の経営分析に関する研究	吉村
70	小林 信善	金沢地区における養豚農家の経営分析	吉村

79	国分 良彦	養豚の団地形成に関する調査研究	吉村
83	佐藤 久明	肉牛生産地の成立条件について	吉村
84	佐野 哲史	岡山県における養豚の現状と将来性	吉村
88	桜井 祥司	大都市近郊における養豚の一貫経営に関する研究	吉村
113	鶴巻 政行	複合経営における養豚の経営設計	吉村
136	平野 秀一	魚沼地方における養豚の現状と発展方向	吉村
125	原 定男	日本養豚の展開過程と今後の課題	吉村
175	山本 雅史	静岡県における肉牛の価格保障政策について	吉村
190	田中 隆	肉用牛の放牧経営に関する事例的研究	吉村
192	川井 裕二	富士農場の粗飼料利用について	吉村
198	橋 恭一	近郊養豚の生産と流通について	吉村
156	三沢 弘幸	吐か喇列島の肉用牛経営について	吉村
16	池田 哲夫	畜産経営における技術の役割について	吉村
49	岡本 光雄	養鶏経営の安定規模について	小杉

178	157	146	141	139	134	132	128	127	120	93
小浜	望月	松本	舟木	藤井	常陸	浜田	林	狭間	長井	須田
卓郎	美博	全都	考之	静江	実	辰巳	晋一郎	悟	政明	秀己
鶏肉ソーセージに関する研究、凍結保存鶏肉を原料としたソーセージの品質および保存性について	家兎肉死後の変化に関する研究	市販フランクフルトソーセージの品質について	豚肉の保存に関する研究 リゾチーム添加の影響について	肉中の脂肪定量法に関する試験	凍結卵黄に関する研究、凍結速度および温度が品質に及ぼす影響	凍結豚肉に関する研究、凍結速度の差が肉質に及ぼす影響	鶏肉の熟成に対するN ₂ 充てん、CO ₂ 充てんおよび真空包装の影響 香辛料が各種動物脂肪の酸化に及ぼす影響	鶏肉の熟成に対するN ₂ 充てん、CO ₂ 充てんおよび真空包装の影響 香辛料が各種動物脂肪の酸化に及ぼす影響	HamのTextureと成分組成との関係について	福島県北地方の豚肉生産および販売の問題点について
鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	吉村

154	148	124	72	57	32	21	19
宮本	三井	原	小松	城所	小川	江口	一瀬
克己	清史	清	信郎	淑江	厚子	信	透
各種鳥卵の卵黄脂質の脂肪酸組成について	濃縮卵液の製造法に関する基礎的研究	貯蔵による粉乳蛋白質のN・Q・S試薬との反応性について	濃縮卵液の製造法に関する基礎的研究	貯蔵による粉乳蛋白質のN・Q・S試薬との反応性について	日本鶏の卵成分に関する比較研究	調製粉乳の高温度下における変質について	卵白の添加がチーズの製造に及ぼす影響
山中	山中	山中	山中	山中	山中	山中	山中

28	27	21	12	181	163	162	158	147	129	126	123
梅田	内山	岩田	伊藤	井沢	柳沢	山本	森川	松原	八角	橋本	間
孝之	繁	弘	博介	康弘	雅仁	拓治	猛	朝己	勇治	憲治	明弘
鶏肉白色筋および赤色筋の凍結貯蔵中における変化に関する研究	豚肝臓の凍結保存中における変化に関する研究	ウインナーソーセージの保存に関する研究 リゾチーム添加の影響	市販プレスハムの品質について	清潔で美観的な牛舎設計	鶏糞の合理的処理とその展望	乳価形成と流通機構	生産費から見た養蜂経営の問題点	酪農の安定的発展と松原牧場の経営分析	現状分析と水田酪農の経営設計	千葉県山武郡内における酪農の安定について	養鶏の危機とインテグレーション
鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	吉村	吉村	吉村	吉村	吉村	吉村	吉村	吉村

畜産物利用学(卵) 研究室

92	91	90	81	80	77	75	73	67	54	48
須坂	須賀康二郎	静野	佐藤	佐藤	後藤	伍賀栄三郎	児玉	栗原	川畑	岡本
治夫	二郎	考	勉	順一	喜宣	三郎	一平	昌弘	満英	重雄
ブロイラー肉の白色筋および赤色筋の死後変化について	鶏卵およびうずら卵の熱凝固に関する研究	牛肉の保存に関する研究、窒素包装の影響	再凍結ブロイラー肉に及ぼす食塩、磷酸塩混合液による浸漬処理の影響	うずら肉に関する研究 冷蔵および凍結保存時の変化について	植物蛋白および脂肪添加ソーセージに関する研究	鶏肉に関する研究 白色筋及び赤色筋の飢餓の影響について	凍結豚肉の解凍方法の差異による肉質の変化について	鶏肉塩漬中の硝酸根および亜硝酸根の消長について	再凍結が肉質に及ぼす影響	豚肉の凍結保存に関する研究
鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原

昭和50年 畜友会会計報告

11月30日現在

収入の部

前年度繰越金	266,711
新入生(211×3000)	633,000
編入生(10×1500)	15,000
利息	10,997
その他	33,700
	<hr/>
	959,408

支出の部

	予 算	決 算
卒業生送別会	36,000	35,356
卒業生記念品	60,000	60,000
ふじみの14号	196,000	196,000
茶話会	10,000	8,647
新入生歓迎会	50,000	53,925
1年生オリエンテーション	15,000	19,120
収穫祭説明会	15,000	14,300
農場見学及びハイキング	10,000	16,033
講演会	5,000	5,300
スポーツ大会	15,000	11,470
収穫祭	250,000	230,034
コンパ援助	40,000	25,200
事務費	60,000	20,961
予備費		
次年度繰越金		
卒業生送別会	40,000	
卒業記念品	60,000	
ふじみの15号部	50,000	
	<hr/>	
	912,000	696,346

収入予算 912,000 - 支出総額 696,346 = 215,654

収入総額 959,408 - 支出総額 696,346 = 263,062
次年度繰越金

会計監査及び12月9日の畜友会総会において承認されました。

畜友会・会計 鈴木康文

昭和50年度 畜友会行事報告

- 49年12月 昭和50年度畜友会発足
- 12月10日 旧役員と新役員の引継会
- 50年 1月 役員補充(山田, 友田)
- 1月23日 卒業生送別会(4号館共通演習室)
- 3月20日 卒業生へ記念品贈呈
- 4月 7日 畜友会役員合宿(年間行事計画設立予算案作成)
~ 8日 「神奈川県伊勢原大山」
- 4月11日 新入生対象茶和会
- 4月18日 1年生オリエンテーション(畜友会の説明)[富士農場]
- 4月24日 新入生歓迎会(4号館共通演習室)
- 4月 役員補充(内堀)
" クラス役員選出
- 5月12日 講演会(講師, 吉村喜彦氏)「今後の畜産をどう考えるか」
- 5月18日 ハイキング(厚木農場見学)
- 5月 研究室役員選出, 役員補充(林, 亀井)
" 1, 2年クラスコンパ, 肉研コンパ援助
- 6月 1日 第1回ソフトボール大会
- 6月 9日 講演会(講師, 渡辺誠喜氏)
- 6月23日 畜友会臨時総会(会費値上げ, 規定改正)
<決議案第1章, 第11条, 第3項, あとは再審議>
- 6月 選管, 会計監査, 規定改正委員選出
- 6月 ~ 7月 夏季個人実習農場リスト作成及び紹介
- 7月 ふじみの編集委員会設立
- 8月 8日 1年生厚木農場実習において収穫祭の説明
- 10月 9日 収穫祭本部開き
(畜産学科第83回収穫祭実行委員会発足)
- 10月 収穫祭
~ 11月
- 12月 7日 第2回ソフトボール大会(雨天のため中止)
- 12月 9日 畜友会定期総会
- 12月 9日の畜友会総会において承認されました。

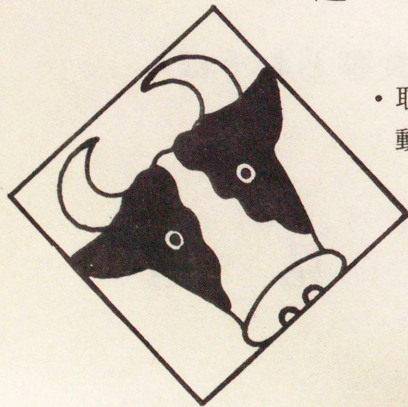
[畜友会]

- ◆ 獣 医 畜 産 器 械
- ◆ 理 化 学 器 機
- ◆ 実 験 動 物 器 機
- ◆ 医 療 器 械

東京都文京区本郷1丁目34番5号
 合資 寿々屋製作所
 会社 電話 (814) 0161 代表 113

躍進する **フジタ製薬**

—畜産業界の名門—



- 取扱品目
動物薬品/器具機械/犬ねこ薬品

当社は昭和5年設立以来、現在まで一貫して優秀な商品を廉価に供給する事を使命とし、畜産界のニーズに応えて来ました。今後とも一層日本畜産界の発展のため努力を重ねる所存です。

FUJITA **フジタ製薬株式会社**
 東京都品川区大崎 2-13-2

編集後記

最初に「ふじみの」が発行されて以来今年で十五年目。この「ふじみの」もやっと十五才になりました。
 我々役員一同は、皆様に十分満足頂けるようにとより多くの方面へ働きかけ嬉しいことに各方面から、内容も大変幅広い多数の原稿を頂くことができ、ここに発行の運びとなりました。
 これからも、この「ふじみの」をよりすばらしいものにする為に、皆様畜友会会員一同の積極的な参加をお願い致します。
 最後に、この「ふじみの」の発行が遅れましたことを深くお詫びすると共に、原稿をお寄せくださった諸先生ならびに学生諸君に深く感謝致します。

編集員一同

昭和51年1月20日発行 発行所 東京都世田谷区桜丘1-1-1
 東京農業大学畜友会
 “ふじみの”第15号 電話(420)2131(呼)
 編集責任者 印刷所 エルデ・タイプ社
 発行者 電話(429)1067

皆様の食堂

清潔な設備
低廉な価格

明るいホール

農大食堂

電話 (420) 4117

歓迎会・部会・クラス会等に御利用下さい

松木家

渋谷円山三業会館隣

電話 (461)2651・7471

バラエティに富んだ

おいしい食事とおそば

農大前

富士見屋

営業時間：8時～19時30分（日曜祝日定休）

